

特30

387



古今
撰和
和歌
歌集
集

全全

明治

44. 6. 28

内交

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき
書籍は、要するに、最も有用なる書籍
なり。
シヨソソソ

緒言

古今和歌集は勅撰歌集の権輿にして、醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等が勅を奉じ撰出せるもの也。其收むる所二十卷一千一百首、技巧に流れず、粗朴に偏せずして、文質共に備り、古來斯道の典範として文人歌客の間に推賞せらる。香川景樹が此集を評して「自然の花」といへりしは、最も肯綮に中れる言ならん。

後撰和歌集は古今集の撰進に後るる事四十六年、村上天皇の天曆五年に、源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、阪上望城の五人を梨壺に集め撰出せしめられし所といふ。鴨長明の無明抄に「後撰集はよろしき歌古今に取り盡されて後いくほども経ざれば歌得難くて姿を選ばずして心を先とせり」といへるが如く、古今集に比しては、情詞共に稍劣れるの觀無き能はずと雖も、之を新古今集以後

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき
書籍は、要するに、最も有用なる書籍
なり。
ジョンソン

緒言

古今和歌集は勅撰歌集の権輿にして、醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等が勅を奉じ撰出せるもの也。其收むる所二十卷一千一百首、技巧に流れず、粗朴に偏せずして、文質共に備り、古來斯道の典範として文人歌客の間に推賞せらる。香川景樹が此集を評して「自然の花」といへりしは、最も肯綮に中れる言ならん。

後撰和歌集は古今集の撰進に後るる事四十六年、村上天皇の天曆五年に、源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、阪上望城の五人を梨壺に集め撰出せしめられし所といふ。鴨長明の無明抄に「後撰集はよろしき歌古今に取り盡されて後いくほども経ざれば歌得難くて姿を選ばずして心を先とせり」といへるが如く、古今集に比しては、情詞共に稍劣れるの觀無き能はずと雖も、之を新古今集以後

の諸集に比する時は、高雅清新の趣を有するに於て、其優劣元より同日の談にあらず。
今本書を覆刻するに當りては、正保四年開版の八代集原本を底本とし、天和二年版の八代集抄を参考せる外、古今集には打聽、遠鏡、正義、後撰集には新抄本の類を参照して、嚴密に校訂し、異説の如きも、すべて原本の形式に準じ、之を傍注する事となしたり。

明治四十四年五月

校訂者 塚本哲三

古今和歌集序

紀 淑 望

夫和歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也。人之在世、不能無爲、思慮易遷、哀樂相變、感生於志、詠形於言。是以逸者其聲樂、怨者其吟悲、可以述懷、可以發憤、動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於倭歌。倭歌有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。若夫春鶯之囀花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠、物皆有之、自然之理也。然而神世七代、時質人淳、情欲無分、倭歌未作、逮于素盞鳴尊、到出雲國、始有三十、一字之詠、今反歌之作也。其後雖天神之孫、海童之女、莫不以倭歌通情者也。爰及人代、此風大興、長歌短歌、旋頭混本之類、雜體非一、源流漸繁、譬猶拂雲之樹、生自寸苗、之煙、浮天之波、起於一滴之露、至如難波津之什獻、
天皇、富緒川之篇、報太子、或事關神異、或興入幽玄、但見上古歌、多存古質之語、未爲耳目之翫、徒爲教誡之端、古

天子每良辰美景。詔侍臣預宴筵者。獻倭歌。君臣之情。由斯可見。賢愚之性。於是相分。所以隨民之欲。擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字。化我日域之俗。民業一改。倭歌漸衰。然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨步古今之間。有山邊赤人者。竝倭歌仙也。其餘業倭歌者。綿々不絕。及彼時變。澆漓人貴奢淫。浮詞雲興。艷流泉涌。其實皆落其花。孤榮至。有好色之家。以此爲花鳥之使。乞食之客。以此爲活計之媒。故半爲婦人之右。難進丈夫之前。近代存古風者。纔二三人而已。然長短不同。論以可辨。花山僧正。尤得歌體。然其詞花而少實。如圖畫好女。徒動人情。在原中將之歌。其情有餘。其詞不足。如菱花雖少。彩色而有。薰香文琳。巧詠物。然其體近俗。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰。其詞華麗。而首尾停滯。如望秋月。遇曉雲。小野小町之歌。古衣通姬之流也。然艷而無氣力。如病婦之著花粉。大友黑主之歌。古猿丸大夫之姿也。頗有逸興。而體甚鄙。如田夫之息花前也。此外姓氏流聞者。不可勝計。其大底皆以艷爲基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利。不用詠倭歌。悲哉悲哉。雖貴

象相將富餘金錢。而骨未腐於土中。名先滅於世上。適爲後世被知者。唯倭歌之人而已。何者。語近人耳。義貫神明也。昔

平城天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歷十代。數過百年。其後倭歌棄不被採用。雖風流如野宰相。雅情如在納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。伏惟

陛下御宇。于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之頰。洋洋滿耳。思繼既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則。御書所預紀貫之前。甲斐少目。凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各獻家集。并古來舊歌。曰續萬葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勒爲二十卷。名曰古今倭歌集。臣等詞少。春花之艷。名竊秋夜之長。況乎進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。適遇倭歌之中興。以樂吾道之再昌。嗟呼人磨既歿。倭歌不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序。

古今和歌集序

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人事わざしけき物なれば、心に思ふ事を見る物きく物につけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らけ、猛き武士の心をも慰むるは歌也。この歌天地の開けはじまりける時より出できにけり。しかあれども世に傳はる事は、久方のあめにしては、下照姫に始り、あらがねのつちにしては、すさのをの尊よりぞおこりける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定らず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの尊よりぞ、三十もじあまり一もじはよみける。かくてぞ、花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心詞おほ

くさまさまになりける。遠き所も出でたつ足もとより始りて年月をわたり、
高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまでおひのほれるが如くに、こ
の歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は帝のおほん始なり。淺香山の言葉は、
采女のたはぶれよりよみて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の
始にもしける。そもそも歌のさま六つなり。からの歌にもかくぞ有るべき。その
六くさの一つにはそへ歌。おほささぎのみかどをそへたてまつれるうた。なに
はづにさくやこの花冬ごもり今ははるべと咲くやこの花といへるなるべし。
二つにはかぞへ歌。咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるも
知らずてといへるなるべし。三つにはなすらへ歌。君にけさあしたの霜のおき
ていなば戀しきごとと消えやわたらむといへるなるべし。四つにはたとへ歌。
わがこひはよむともつきじありそ海の濱の眞砂はよみつくすともといへる
なるべし。五つにはただごと歌。偽のなき世なりせばいかばかり人の言の葉う

れしからましといへるなるべし。六つにはいはひ歌。この殿はむべもとみけり
さき草のみつばよつばにとのづくりせりといへるなるべし。今の世の中、色に
つき、人の心花になりけるより、あだなる歌はかなきことのみ出でくれば、色
ごのみの家に、埋木の人しれぬ事となりて、まめなる所には、花はな薄はくほにいだすべ
き事にもあらず成りにたり。その始を思へば、かかるべくなむあらぬ。いにしへ
の代々の帝、春の花のあした、秋の月の夜ごともてあそぶに、さぶらふ人々をめして、ことに
つけつつ歌を奉らしめ給ふ。あるは花をこふとて、たよりなき所にまどひ、ある
は月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見たまひて、さかしおろかな
りとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さされ石にたとへ、筑波山にかけ
て君を願ひ、よろこび身にすぎたのしみ心にあまり、富士の煙によそへて人を
こひ、松蟲のねに友をしのび、高砂住の江の松もあひおひのやうに覺え、男山の
昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又春

のあしたに花のちるを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の露水の沫を見て、我が身をおどろき、あるは昨日は榮えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴のはねがきをかぞへ、あるは吳竹のうきふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、今はふじの山も煙たたずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。いにしへよりかく傳はるうちにも、奈良のおほん時よりぞひろまりにける。かの御世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時におほきみつのくらの柿本の人麿なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身を合せたりといふなるべし。秋のゆふべ龍田川に流るる紅葉をば、みかどのおほん目には錦と見給ひ、春のあした吉野山の櫻は、人麿が心には雲かとのみなむ覺えける。又山邊赤人といふ人あり、歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人がかみに

たたむ事かたく、赤人は人麿がしもにたたむ事かたくなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、吳竹のよよに聞え、片糸のよりよりに絶えずぞ有りける。これよりさきの歌をあつめてなむ、萬葉集となづけられたりける。ここにいにしへの事をも、歌の心をも知れる人、わづかにひとりふたりなりき。しかあれど、これかれ得たる所えぬ所、たがひになむある。かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世はとつぎになむなりにける。いにしへの事をも歌をも知れる人よむ人多からず。今この事をいふに、つかさ位高き人をば、たやすきやうなればいれず。その外に近き世にその名聞えたる人は、すなはち僧正遍昭は、歌のさまはえたれども、誠すくなしたとへば、繪にかける女を見て、徒に心を動かすが如し。在原業平は、その心餘りて詞たらず、しほめる花の色なくて、にほひ残れるが如し。文屋康秀は、詞たくみにてそのさま身におはず、いはば商人のよききぬ著たらむが如し。宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして、始終たしかならず、いはば

秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し。よめる歌おほくきこえねばこれかれ
かよはしてよく知らず。小野小町はいにしへの衣通姫の流なり。あはれなるや
うにてつよからず、いはばよき女のなやめる所あるに似たり。つよからぬはを
うなの歌なればなるべし。大友黒主はそのさまいやし、いはば薪を負へる山人
の、花の陰にやすめるが如し。このほかの人々、その名きこゆる、野邊におふるか
つらのはひひろごり、林にしけき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひてそ
のさま知らぬなるべし。かかるに今すべらぎの天の下しろしめすこと、四の時
九のかへりになむなりぬる。あまねきおほんうつくしみの波、八島のほかまで
流れ、廣きおほん恵の陰、筑波山の麓よりもしけくおはしまして、よろづのまつ
りごとをきこしめすいとま、もろもろの事を捨て給はぬあまりに、いにしへの
事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にもつ
たはれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則御書の所のおづかり紀貫之、

さきの甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉
集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それがなかにも、梅
をかざすよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また鶴
龜につけて君をおもひ、人をもいはひ、秋萩夏草を見て妻をこひ、逢坂山にいた
りてたむけを祈り、あるは春夏秋冬にもいらぬくさぐさの歌をなむ、えらばせ
たまひける。すべて千歌二十卷、名づけて古今和歌集といふ。かくこのたびあつ
めえらばれて、山下水のたえず、濱のまさごの敷おほくつもりぬれば、今は飛鳥
川の瀬になるうらみも聞えず、さされ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。
それまぐら言葉は春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ秋の夜の長き
をかこてれば、かつは人のみみにおそり、かつは歌の心にはち思へど、たなびく
雲のたちるなく、鹿のおきふしは、貫之らがこの世におなじくうまれて、この事
の時にあへるをなむよろこびぬる。人磨なくなりたれど、歌のこととどまれ

るかな。たとひ時うつり事さりたのしびかなしびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸たえず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長くつたはり、鳥の跡ひさしくとどまれらば、歌のさまをも知り、ことの心をも得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、いにしへをあふぎて、今を戀ひざらめかも。

古今和歌集目錄

卷一	春歌上	一
卷二	春歌下	一三
卷三	夏歌	二五
卷四	秋歌上	三一
卷五	秋歌下	四四
卷六	冬歌	五七
卷七	賀歌	六二
卷八	離別歌	六七
卷九	禰旅歌	七六
卷十	物名	八二
卷十一	戀歌一	九一

卷十二	戀歌二	一〇〇
卷十三	戀歌三	一一〇
卷十四	戀歌四	一二一
卷十五	戀歌五	一三三
卷十六	哀傷歌	一四六
卷十七	雜歌上	一五五
卷十八	雜歌下	一六九
卷十九	長歌	一八三
	旋頭歌	一八九
	誹諧歌	一九〇
卷二十	大歌所御歌	一九九
	神あそびの歌	二〇〇
	東歌	二〇二

後撰和歌集目録

卷一 春歌上……………二〇九
 卷二 春歌中……………二一九
 卷三 春歌下……………二二六
 卷四 夏歌……………二四〇
 卷五 秋歌上……………二五三
 卷六 秋歌中……………二六二
 卷七 秋歌下……………二七六
 卷八 冬歌……………二九一
 卷九 戀歌一……………三〇〇
 卷十 戀歌二……………三一七
 卷十一 戀歌三……………三三八

卷十二 戀歌四……………三六〇
 卷十三 戀歌五……………三八一
 卷十四 戀歌六……………四〇三
 卷十五 雜歌一……………四二〇
 卷十六 雜歌二……………四三四
 卷十七 雜歌三……………四五一
 卷十八 雜歌四……………四六五
 卷十九 離別歌……………四七七
 穉旅歌……………四八六
 卷二十 慶賀歌……………四九二
 哀傷歌……………四九六

古今和歌集 卷第一

春歌上

ふる年に春立ちける日よめる

在原元方

年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

春立ちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

題しらす

讀人しらす

春かすみ立てるやいつこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ

二條后の春のはじめの御歌

雪のうちに春はきにけりうぐひすの氷れる涙いまやとくらむ

題しらす

讀人しらす

梅が枝にきる鶯はるかけて鳴けきもいまだゆきはふりつつ

素性法師

雪の木に降りかかれるをよめる

春たてば花とや見らむしら雪のかかれる枝にうぐひすのなく

讀人しらす

題しらす

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

或人の曰くさきのおほきおほいまうち君の歌なり

二條后の東宮の御息所みやすんじころときこえける時正月三日

御前に召して仰言たまはせたまひある間に日は照りながら雪の

頭に降りかかりけるをよませ給ひける

文屋康秀

春の日の光にあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき

雪の降りけるをよめる

紀貫之

かすみたち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける

春のはじめによめる

藤原言直

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

春のはじめの歌

玉生忠岑

春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞおもふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌

源當純

谷風にとくる氷のひまごとにうち出づるなみや春のはつはな

紀友則

はなの香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

大江千里

鶯のたによりいづるこゑなくば春くることをたれか知らまし

在原棟梁

春たてど花もにははぬ山里はものうかる音にうぐひすぞなく^の

題しらす

讀人しらす

野邊ちかく家居しをれば鶯のなくなる聲はあさなあさな聞く
春日野は今日はな焼きそ若草の妻もこもれりわれもこもれり
かすが野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜つみてむ
みやまには松の雪だにきえなくに都は野邊のわかな摘みけり
梓弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さへふらば若菜つみてむ

仁和のみかど皇子におましましける時に人に若

菜たまひける御歌

君がため春の野にいでてわかな摘むわが衣手に雪はふりつつ

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる

貫

之

春日野の若菜つみにやしるたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

題しらす

在原行平朝臣

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

寛平の御時后の宮の歌合に詠める^{の歌}

源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

歌奉れと仰せられし時詠みてたてまつれる

貫

之

我がせこが衣はる雨ふるごとに野邊のみどりぞ色まさりける

あをやぎの糸よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

あさみどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか

題しらす

讀人しらす

百千鳥さへぐる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく

をちこちのたづきも知らぬ山中におほつかなくも呼子鳥かな

雁の聲を聞きて越へまかりける人を思ひてよめる 凡河内躬恒
春くれば雁かへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし

歸る雁をよめる

伊

勢

春がすみたつを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる

題しらす

讀人しらす

折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここにうぐひすの鳴く
いろよりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ども
宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり
梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

梅の花を折りてよめる

東三條の左のおほいまうち君

うぐひすの笠にぬふてふ梅の花をりてかざさむ老かくるやと

題しらす

素性法師

外にのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける

友

則

君ならでたれにか見せむ梅のはな色をも香をも知る人ぞしる

くらぶ山にてよめる

貫

之

梅の花にほふ春べはくらぶ山間に越ゆれどしるくぞありける

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをると

躬

恒

てよめる

月夜にはそれとも見えす梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜の闇はあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくるる
初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しくや
どらでほどへて後にいたれりければ彼の家のあ

るじかくさだかになむやどりはあるといひ出し
て侍りければそこにたてりける梅の花を折りて

よめる

貫

之

人はいさ心もしらすふるさは花ぞむかしの香ににほひける

水のほとりに梅の花の咲けりけるを詠める

伊

勢

春ごとにながるる川を花と見て折られぬ水にそでやぬれなむ
年をへて花の鏡となる水はちりかかるといふらむ

家に有りける梅の花のちりけるをよめる

貫

之

暮ると明くとめかれぬ物を梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌

読人しらす

梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐとも形見ならまし

素性法師

散ると見てあるべき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる

題しらす

読人しらす

ちりぬとも香をだに残せ梅のはな戀しきときの思ひ出にせむ

人の家にうゑたりける櫻の花咲きはじめたりけ

貫

之

ことしより春知りそむる櫻花ちるといふことは習はざらなむ

題しらす

読人しらす

山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそわれ見はやさむ

又は里とほみ人もすさめぬ山櫻

山櫻わが見にくればはるがすみ嶺にもをにもたちかくしつ

染殿の後の御前に花瓶に櫻の花をささせ給へるを見て

よめる

前のおほきおほいまうち君

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

渚の院にて櫻を見てよめる

在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこころはのどけからまし

題しらす

讀人しらす

いはば^ししる瀧なくもがな櫻花たをりてもこむ見ぬひとのため

山の櫻を見てよめる

素性法師

見てのみや人にかたらむ櫻花手ごとに折りていへづとにせむ

花ざかりに京を見やりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞはるのにしきなりける

櫻の花の下^きにて年の老いぬる事を歎きてよめる

紀友則

色も香もおなじ昔に咲くらめどとしふる人ぞあらたまりける

をれる櫻をよめる

貫之

たれしかもとめてをりつる春がすみ立ちかくすらむ山の櫻を

歌奉れと仰せられし時によみてたてまつれる

櫻花咲きにけらしもおしびきの山のかひより見ゆるしらくも

寛平の御時后の宮の歌合の歌

友則

みよし野の山邊にさける櫻ばな雪かどのみぞあやまたれける

やよひに閏月の有りける年よみける

伊勢

さくらばな春くははれる年だにもひとの心にあかれやはせぬ

櫻の花のさかりに久しくとはざりける人のきた

りける時によみける

讀人しらす

あだなりと名にこそたてれ櫻花としにまれなる人も待ちけり

かへし

業平朝臣

今日こそば明日は雪とぞ降りなまし消えずは有りとも花と見ましや

題しらす

讀人しらす

ちりぬれば戀ふれど驗なきものをけふこそ櫻をらば折りてめ
折りとらばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散る迄は見む

紀 在 友

さくら色に衣はふかくそめてきむ花のちりなむ後のかたみに

櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける人

躬 恒

によみておくりける

我が宿の花見がてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき

伊 勢

亭子院歌合の時よめる

見る人もなき山里のさくら花ほかのちりなむのちぞ咲かまし

古今和歌集 卷第二

春歌下

題しらす

讀人しらす

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく
待てといふに散らでしとまる物ならば何を櫻に思ひまさまし
のこりなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての愛ければ
このさとに旅寐しぬべし櫻ばなちりのまがひに家路わすれて
うつ蟬の世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散りにけり
僧正遍昭によみておくりける
惟喬のみこ
櫻花ちらばちらなむ散らすとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にて櫻の花のちりけるを見てよめる そうく法師

櫻散るはなのところは春ながら雪ぞふりつつきえがてにする

櫻の花の散り侍りけるを見て詠みける 素性法師

花ちらす風のやどりはたれかしるわれに教へよ行きて恨みむ そうく法師

雲林院にて櫻の花をよめる

いざ櫻我もちりなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ

あひ知れりける人のまうできて歸りにける後に 貫之

よみて花にさしてつかはしける

ひとめ見し君もやくると櫻花けふは待ちみて散らばちらなむ

山の櫻を見てよめる

春がすみなにかくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

心地そこなひてわづらひける時に風にあたらじ

とておろしこめてのみ侍りける間に折れる櫻の

散りがたになれりけるを見てよめる 藤原よるか朝臣

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

春宮の雅院にて櫻の花のみかは水にちりてなが

れけるを見てよめる 菅野高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちて水見れの泡とこそなれ 貫之

櫻の花のちりけるをよめる

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花みるわれさへにしづ心なし

櫻のごと疾くちる物はなしと人のいひければよ

める

さくら花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

さくらの花のちるをよめる 紀友則

久かたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちるらむ

春宮の帯刀たはきの陣にて櫻の花の散るをよめる 藤原好風

春風ははなのあたりをよきて吹け心づからやうつろふとみむ

櫻のちるをよめる 凡河内躬恒

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹くらむ

ひえに登りて歸りまうできて詠める 貫之

山たかみ見つつわがこし櫻花かぜはこころにまかすべらなり

題しらす 一本 大伴黒主

はるさめの降るは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなければ

亭子院の歌合の歌 貫之

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに波ぞ立ちける

ならのみかどの御歌

故郷となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり

春の歌とてよめる 良岑宗貞

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

寛平の御時后の宮の歌合の歌 素性法師

花の木も今はほり植ゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり

題しらす 讀人しらす

春の色の到り到らぬ里はあらじ咲けるさかざる花の見ゆらむ

春の歌とてよめる 貫之

三輪山をしかもかくすか春がすみ人にしられぬ花やさくらむ

雲林院の皇子みこのもとに花見に北山のほとりにま

かれりける時によめる 素性

いざけふは春の山邊にまじりなむ暮れなばなけの花の蔭かは

春の歌とてよめる

いつ迄か野邊に心のあくがれむ花し散らずば千代も經ぬべし

題しらす

讀人しらす

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり
花のごと世の常ならばすぐしてし昔はまたもかへり來なまし
吹く風にあつらへつくる物ならば此一本はよきよといはまし
待つひと來ぬものゆるゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

藤原興風

咲く花はちぐさながらにあだなれど誰かは春を恨みはてたる
春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかけかも

在原元方

かすみたつ春の山邊はとほけれど吹きくる風は花の香ぞする

うつろへる花を見てよめる

躬恒

花みれば心さへにぞうつりけるいろには出でじ人もこそ知れ

題しらす

讀人しらす

鶯のなく野邊ごとに來てみればうつろふ花にかぜぞ吹きける
吹くかぜをなきてうらみよ鶯はわれやは花に手だにふれたる

典侍治子朝臣

散る花のなくにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは

仁和の中將の御息所の家に歌合せむとてしける

時によめる

藤原後蔭

花のちることやわびしき春がすみたつたの山のうぐひすの聲

鶯の鳴くをよめる

素性

木傳へばおのが羽風にちる花を誰におほせてこころ鳴くらむ

鶯の花の木にて鳴くをよめる

躬 恒

しるしなき音をもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらす

讀人しらす

駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそはなは散るらめ

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もともにあらむものは

小野 小町

花の色は移りにけりな徒に我が身世にふるながめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとてし

ける時によめる

素 性

をしと思ふ心は糸によられなむ散る花ごとにぬきてとどめむ

志賀の山越にをんなの多くあへりけるによみて

遣しける

貫 之

梓弓はるのやまべを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春の山邊にねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

吹く風と谷の水としなかりせばみやまがくれの花を見ましや

志賀より歸りける女どもの花山に入りて藤の花

の下に立ちよりて歸りけるに詠みて送りける 僧 正 遍 昭

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

家に藤の花さけりけるを人の立ちとまりて見け

るをよめる

躬 恒

我が宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ

題しらす

読人しらす

今もかも咲きにほふらむたちばなのこじまのさきの山吹の花
はるさめに匂へるいろもあかなくに香さへなつかし山吹の花
山吹はあやなな咲きそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに

吉野川の邊に山吹の咲けりけるをよめる

貫之

吉野川きしのやまぶき吹く風に底のかけさへうつろひにけり

題しらす

讀人しらす

かはづなく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

此歌は或人のいはく橋のきよともが歌なり

春の歌とてよめる

素性

思ふどち春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅寐してしが

春のとく過ぐるをよめる

躬恒

梓弓春たちしよりとしつきの射るがごとくもおもほゆるかな

やよひに鶯の聲久しう聞えざりけるをよめる

貫之

鳴きとむる花しなれば鶯もはてはものうくなりぬべらなり

やよひのつごもりがたに山を越えけるに山川よ

り花の流れけるをよめる

深養父

花ちれる水のまにまにとめくれば山にも春はなくなりそいにけり

春を惜みてよめる

元方

をしめどもとどまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

興風

聲たえずなげや鶯ひととせにふたたびとだに來べきはるか

やよひのつごもりの日花つみより歸りける女ど

もを見てよめる

躬

恒

とどむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

やよひのつごもりの日雨の降りけるに藤の花を

折りて人に遣しける

業平朝臣

ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

亭子院の歌合に春のはての歌

躬

恒

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかけかは

古今和歌集 卷第三

夏歌

題しらす

讀人しらす

我がやどの池の藤波さきにけり山ほととぎすいつが來なかむ

この歌ある人のいはく柿本人麿がなり

卯月にさける櫻を見てよめる

紀としさだ

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれて獨さくらむ

題しらす

讀人しらす

さつきまつ山郭公うち羽ぶきいまもなかなむ去年のふるこゑ

伊勢

五月さつきこばなきもふりなむ郭公まだしきほごのこゑをきかばや

讀人しらす

さつき待つ花たちばなの香をかけば昔のひとの袖の香ぞする
いつのまに五月きぬらむあしびきのやま郭公いまぞ鳴くなる
けさきなき未だ旅なるほととぎす花たちばなに宿はからなむ

音羽山を越えける時に郭公の鳴くをききてよめる 紀 友 則

音羽山けさ越えくればほととぎす梢はるかにいまぞなくなる

郭公の初めて鳴きけるを聞きてよめる 素 性

ほととぎす初聲きけばあぢきなく主かみさだまらぬ戀せらるはた

奈良の石いその上かみ寺にて郭公の鳴くをよめる

いそのかみふるきみやこの郭公聲ばかりこそむかしなりけれ

題しらす 讀人しらす

夏山になくほととぎす心あらば物おもふわれに聲な聞かせそ
ほととぎすなく聲きけばわかれにし故郷さへぞ戀しかりける
郭公ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから
思ひいづるときはの山の郭公からくれなるのふり出てぞ鳴く
こゑはして涙は見えぬほととぎすわが衣手のひづをからなむ
あしびきの山郭公をりはへてたれかまさると音ねをのみぞなく
いまさらに山へかへるな郭公こゑのかぎりは我がやどに鳴け

みくにのまち

やよやまで山郭公ことづてむわれ世のなかにすみわびぬとよ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌 紀 友 則

さみだれに物思ひをれば郭公夜ぶかく鳴きていづち行くらむ
夜やくらき道やまどへる郭公わがやどをしも過ぎがてに鳴く

やどりせし花たちばなも枯れなくになど郭公こゑたえぬらむ
大江千里

紀貫之

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑに明くるしのめ

壬生忠岑

暮るるかともれば明けぬる夏の夜をあかずとや鳴くやま郭公

紀秋岑

夏山にこひしき人や入りにけむ聲ふりたてて鳴くほととぎす

題しらす

讀人しらす

去年の夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

郭公の鳴くを聞きてよめる

貫之

五月雨のそらもとどろに郭公なにをうしとか夜ただ鳴くらむ

さぶらひにてをのこどもの酒たうべけるに召し

て郭公まつ歌よめとありければよめる

躬恒

郭公こゑもきこえず山びこはほかに鳴く音をこたへやはせぬ

山に郭公の鳴きけるを聞きてよめる

貫之

郭公ひとまつやまに鳴くなればわれうちつけに戀まさりけり

早くすみける所にて郭公の鳴きけるを聞きてよめる

忠岑

むかしべや今も戀しきほととぎす故郷にしもなきてきつらむ

郭公の鳴きけるを聞きてよめる

躬恒

ほととぎすわれとはなしにうの花の憂世の中に鳴き渡るらむ

蓮の露を見てよめる

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月の面白かりける夜あかつきがたによめる

深養父

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらむ

隣より常夏の花をこひにおこせたりければをし

みてこの歌をよみて遣しける

躬

恒

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしよりいもと我がぬる常夏の花

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひちはかたへ涼しき風や吹くらむ

古今和歌集・卷第四

秋歌上

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

秋立つ日うへのをのこども賀茂の川原に川道遙

しけるとともにまかりてよめる

貫

之

川風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

題しらす

讀人しらす

我がせこがころもの裾を吹きかへしうら珍らしき秋のはつ風
昨日こそさなへとりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風ぞ吹く

秋風の吹きにし日より久かたのあまの河原にたたぬ日はなし
ひさかたの天の河原のわたしもり君渡りなばかぢかくしてよ
天の川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ
こひ戀ひて逢ふ夜は今宵天の川霧たち渡りあけずもあらなむ

寛平の御時七日の夜うへにさぶらふ男ども歌奉

れと仰せられける時人にかはりてよめる

友

則

天の川あさせしら波たどりつつ渡りはてねば明けぞしにける

同じ御時きさいの宮の歌合の歌

藤原興風

契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

なぬかの日の夜よめる

凡河内躬恒

年ごとに逢ふとはすれど七夕のぬる夜の數ぞすくなかりける

たなばたにかしつる糸のうちはへて年のを長く戀ひや渡らむ

題しらす

素

性

今宵來む人にはあはじたなばたの久しき程に待ちもこそすれ

七日の夜の曉によめる

源宗于朝臣

今はとてわかるるときは天の川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

八日の日よめる

玉生忠岑

けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみ待ち渡るべき

題しらす

讀人しらす

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり
大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ
わが爲にくる秋にしもあらくに蟲の音きけばまづぞ悲しき
物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつつ移ろひゆくをかぎりと思へば
ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり

これさだのみこの家の歌合の歌

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける

かんなりのつほに人々集りて秋の夜をしむ歌よ

みけるついでによめる

躬

恒

かく許をしと思ふ夜をいたづらに寐て明すらむ人さへぞうき

題しらす

讀人しらす

しら雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへみゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月渡るみゆ

是貞のみこの家の歌合によめる

大江千里

月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

忠

岑

久かたのつきの桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ

月をよめる

在原元方

秋の夜のつきの光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

人のもとにまかれりける夜きりぎりすの鳴きけ

るを聞きてよめる

藤原ただふさ

葦きりぎりすいたくな鳴きそあきの夜のながきおもひはわれぞまされる

是貞のみこの家の歌合のうた

敏行朝臣

秋の夜の明くるもしらす鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ

題しらす

讀人しらす

秋萩も色づきぬればきりぎりすわがねぬごとや夜はかなしき

秋の夜は露こそことにさむからし草むらごとに蟲のわぶれば

君しのぶ草にやつるる故郷はまつむしの音ぞかなしかりける

秋の野に道もまだひぬ松蟲のこゑするかたにやどやからまし

秋の野に人まつ蟲の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ
もみぢ葉の散りて積れる我が宿に誰をまつ蟲こころ鳴くらむ
蜩せみのなきつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける
ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

初雁をよめる

在原元方

待つ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしきかな

是貞のみこの家の歌合の歌

友則

秋風に初雁がねぞきこゆなるたがたまづさをかけて來つらむ

題しらす

讀人しらす

我が門に稻おほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は來にけり
いと早も鳴きぬる雁か白露の色どる木々ももみぢあへなくに
春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりのうへに

夜を寒み衣かりがねなくなべにはぎの下葉もうつろひにけり

此歌は或人のいはく柿本人麿がなりと

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあけてくる船は天のとわたる雁にぞありける

雁のなきけるを聞きてよめる

躬恒

うきことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合の歌

忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音にめをさましつ

讀人しらす

おくやまに紅葉ふみわけなく鹿の聲きくときぞ秋はかなしき

題しらす

秋萩にうらびれをればあしびきの山したとよみ鹿の鳴くらむ

秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさき

是貞のみこの家の歌合によめる

秋萩のはな咲きにけりたかさごのをへの鹿は今やなくらむ

昔あひ知りて侍りける人の秋の野にて逢ひて物

語しけるついでによめる

躬

恒

あき萩のふるえにさける花みればもとの心はわすれざりけり

題しらす

讀人しらす

秋萩の下葉色づくいまよりやひとりある人のいねがてにする

なきわたる雁の涙やおちつらむものおもふ宿の萩のうへの露

萩のつゆ玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ

ある人のいはくこの歌は奈良の帝の御歌なりと

をりてみばおちぞしぬべき秋萩のえだもたわわとをわにおける白露

萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

是貞のみこの家の歌合によめる

文屋朝康

秋の野におく白露はたまなれやつらぬきかくるくもの糸すぢ

題しらす

僧正遍昭

名にめで折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな

僧正遍昭が許に奈良へまかりける時に男山にて

女郎花を見てよめる

布留今道

女郎花うしとみつつぞゆきすぐる男山にしたてりとおもへば

是貞のみこの家の歌合の歌

敏行朝臣

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

題しらす

小野美材

女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

朱雀院の女郎花合に詠みて奉りける
左のおほいまうち君
をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

秋ならであふことかたき女郎花あまの川原におひぬものゆゑ
藤原定方朝臣
貫之

たがあきにあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ
躬恒

妻こふる鹿ぞなくなる女郎花おのがすむ野のはなとしらすや
女郎花ふきすぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ
忠岑

人の見ることやくるしき女郎花秋ぎりにのみたちかくるらむ
ひとりのみ眺むるよりは女郎花わがすむ宿にうゑて見ましを

物へまかりけるに人の家に女郎花うゑたりける
兼寛王
を見てよめる

女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたるやどに獨たてれば
寛平の御時藏人所のをのことも嵯峨野に花見む
とてまかりたりける時歸るとて皆歌よみけるつ
いでによめる
平貞文

花にあかでなに歸るらむ女郎花おほかる野邊にねなまし物を
是貞のみこの家の歌合の歌
敏行朝臣

何人かきてぬぎかけしふぢばかま來る秋ごとに野邊を匂はす
藤袴をよみて人に遣しける
貫之

やどりせし人のかたみか藤ばかま忘れがたき香に匂ひつつ
ふぢばかまをよめる
素性

ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも

題しらす

平貞文

今よりは植ゑてだに見じ花薄ほにいつる秋はわびしかりけり

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

在原むねやな

秋の野のくさのたもとか花薄ほにいでてまねく袖とみゆらむ

素性法師

われのみやあはれと思はむあはれ蚕あはれなくゆふかけのやまとなでしこ

題しらす

讀人しらす

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

もも草の花のひもとく秋の野におもひたはれむ人などがめそ

月草に衣はすらむあさ露にぬれてののちはうつろひぬとも

仁和の帝みこにおはしましける時ふるの瀧御覽

せむとておはしましける道に遍昭が母の家に宿
り給へりける時に庭を秋の野につくりて御物語
のついでによりて奉りける
里はあれて人はふりにし宿なれば庭もまがきも秋の野らなる

僧正遍昭

古今和歌集 卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌

文屋康秀

吹くからに秋の草木の萎るればむべ山風をあらしといふらむ
草も木も色かはれどもわたつ海の波のはなにぞ秋なかりける

秋の歌合しける時によめる

紀淑望

もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたるらむ

題しらす

讀人しらす

霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたのはらはもみぢしぬらむ
神無月しぐれもいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびの森

ちはやぶる神なびやまのもみぢ葉に思はかけじうつろふ物を

貞観の御時綾綺殿の前に梅の木ありけり西の方

にさせりける枝のもみぢそめたりけるをうへに

さぶらふをのこどものよみけるついでによめる

藤原勝臣

おなじえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋の初なりけれ

石山に詣でける時音羽山の紅葉を見てよめる

貫之

秋風のふきにし日よりおとは山みねのこずゑも色づきにけり

是貞のみこの家の歌合によめる

敏行朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢにそむらむ

壬生忠岑

あきの夜の露をばつゆとおきながら雁の涙や野邊をそむらむ

題しらす

讀人しらす

秋の露色々におけばこそやまの木の葉のちぐさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

貫之

しらつゆも時雨もいたくもる山は下葉のこらす色づきにけり

秋の歌とてよめる

在原元方

雨ふれどつゆももらじを笠とりの山はいかでか紅葉そめけむ

神の社のあたりをまかりける時にいがきのうち

の紅葉を見てよめる

貫之

ちはやぶる神のい垣にはふ葛も秋にはあへすうつろひにけり

是貞のみこの家の歌合によめる

忠岑

雨ふればかさとり山のもみぢ葉は行きかふ人の袖さへぞてる

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

讀人しらす

散らねどもかねてぞをしき紅葉もみぢは今はかぎりの色と見つれば

大和の國にまかりける時佐保山にきりのたてり

けるを見てよめる

紀友則

たがための錦なればか秋霧のさほのやまべをたちかくすらむ

是貞のみこの家の歌合のうた

讀人しらす

秋霧は今朝はなたちそさほやまの柞ははせのもみぢよそにても見む

秋の歌とてよめる

坂上是則

さほ山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

人の前まへ裁ざいに菊に結び附けて植ゑける歌

在原業平朝臣

うゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへ枯れめや

寛平の御時菊の花をよませたまうける

敏行朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

この歌はまだ殿上ゆるされざりけるときに召しあげられて

つかうまつるとなむ

是貞のみこの家の歌合の歌

紀友則

露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかるべく

寛平の御時後の宮の歌合の歌

大江千里

植ゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

同じ御時せられける菊合に洲濱をつくりて菊の

花植ゑたりけるにくはへたりける歌

吹上の濱に菊植ゑたりけるをよめる

菅原朝臣

秋風のふきあけにたてる白菊ははなかあらぬか波のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけむ

菊の花のもとにて人の人待てるかたをよめる

友則

花見つつ人まつ時はしろたへの袖かとのみぞあやまたれける

おほ澤の池のかたに菊植ゑたるをよめる

ひともと思ひし花をおほさはの池の底にもたれか植ゑけむ

世の中のはかなきことを思ひける折に菊の花を

見てよめる

貫之

秋の菊匂ふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

白菊の花をよめる

凡河内躬恒

こころあてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花

是貞のみこの家の歌合の歌

讀人しらす

いろかはる秋の菊をばひととせにふたたび匂ふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花めしける時に歌そへて奉れと仰

せられければよみて奉りける

平貞文

秋をおきて時こそ有りけれ菊の花移ろふからに色のまされば

人の家なりける菊の花を移し植ゑたりけるをよ

める

貫

之

咲きそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらす

讀人しらす

さほ山の柞はほそのみぢ散りぬべみよるさへ見よと照らす月かけ

宮づかへ久しうつかうまつらで山里にこもり侍

りけるによめる

藤原關雄

奥山のいはがき紅葉ちりぬべし照る日のひかり見る時なくて

題しらす

讀人しらす

たつたがは紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

此歌は或人奈良の帝(文武天皇)の御歌なりとなむ申す

龍田川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

又はおすか川もみぢ葉流る 此歌不注三人磨歌一

戀しくば見てもしのぼむ紅葉を吹きな散らしそ山おろしの風

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬわれぞ悲しき

秋はきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみ分けてとふ人はなし

ふみわけて更にや訪はむ紅葉のふりかくしたる道と見ながら

秋の月やまべさやかにてらせるはおつる紅葉の數を見よとか

吹く風の色の千種ちかに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり

關雄

霜のたて露のぬきこそよわからしやまの錦の織ればかつちる

雲林院りんいんの木のかけにたたずみてよみける

僧正遍昭

わび人のわきて立ちよる木の下は頼むかけなく紅葉散りけり

二條の後の春宮の御息所と申しける時に御屏風
に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題

にてよめる

もみぢ葉のながれてとまるみなとには紅ふかき波そたちけるやたつらむ

業平朝臣 性

ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなるに水くくるとは

是貞のみこの家の歌合の歌

敏行朝臣

我がきつる方も知られずくらぶ山木々のこの葉の散るとまが紛ふに

忠岑

かみなびのみむろのやまを秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ

北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる

貫之

見るひともなくて散りぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり

秋の歌

兼寛王

龍田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ

小野といふ所にすみ侍りける時もみぢを見てよ

貫之

あきのやま紅葉を幣ぬさとたむくれば住むわれさへぞ旅心地する

神なび山を過ぎて龍田川を渡りける時に紅葉の

清原深養父

かみなびの山を過ぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

寛平の御時后の宮の歌合の歌

藤原興風

白波にあきの木の葉のうかべるをあまの流せる船かとぞ見る

龍田川のほとりにてよめる

坂上是則

もみぢ葉の流れざりせば龍田川みづの秋をばたれか知らまし

志賀の山越にてよめる

春道列樹

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる

躬恒

風ふけばおつるもみぢ葉水きよみちらぬ影さへ底に見えつつ

亭子院の御屏風の繪に川渡らむとする人の紅葉

のちる木のもとに馬をひかへて立てるをよませ

給ひければつかうまつりける

立ちとまり見てをわたらむ紅葉は雨と降るとも水はまさらじ

是貞のみこの家の歌合の歌

忠岑

山田もる秋のかり庵におくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり

題しらす

讀人しらす

ほにもいでぬ山田をもるとふぢ衣稻葉の露にぬれぬ日はなし

刈れる田に生ふる稔ひつちのほに出ぬは世を今更にあき果てぬとやか
素性法師

北山に僧正遍昭と茸狩にまかれりけるによめる
もみぢ葉は袖にこき入れてもて出いなむむ秋は限と見む人のため

寛平の御時ふるき歌奉れとおほせられければ龍

田川もみぢ葉流るといふ歌を書きてその同じ心

をよめりける

興風

みやまより落ちくる水の色みてぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

秋のはつる心を龍田川に思ひやりてよめる

貫之

年ごとにみぢ葉ながる龍田川みなとや秋のとまりなるらむ

なが月のつごもりの日大井にてよめる

ゆふづくよをぐらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ

同じつごもりの日よめる

躬恒

道しらば尋ねも行かむもみぢ葉を幣かぎとたむけて秋はいにけり

古今和歌集 卷第六

冬歌

題しらす

讀人しらす

たつた川にしきおりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

冬の歌とてよめる

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬとおもへば

題しらす

讀人しらす

おほぞらの月の光しきよければかけ見し水ぞまづこほりける
夕されば衣手さむしみの吉野のやまにみゆきふるらし
今よりはつぎて降らなむわが宿のすすきおしなみふれる白雪

ふる雪はかつぞけぬらし足びきの山の瀧つ瀬おとまさるなり
この川にもみぢばながる奥山のゆきけの水ぞいままさるらし
ふるさとは吉野の山しちかければ一日もみ雪ふらぬ日はなし
我が宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

冬の歌とてよめる

紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬはなぞ咲きける

志賀の山ごえにてよめる

紀あきみね

白雪のところもわかず降りしけば巖にも咲くはなとこそ見れ

奈良の京にまかれりける時に宿りける所にてよ

める

坂上是則

みよしのの山のしら雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり

寛平の御時后の宮の歌合の歌

藤原興風

浦ちかく降りくる雪はしらなみのすゑの松山こすかとぞ見る

壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

白雪のふりてつもれるやま里はすむ人さへやおもひきゆらむ

雪のふるを見てよめる

凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬ道なれや跡はかもなくおもひ消ゆらむ

雪のふりけるをよみける

清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

雪の木に降りかかれりけるを詠める

貫之

冬ごもり思ひかけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける

大和の國にまかれりける時に雪の降りけるを見

てよめる

坂上是則

あさほらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降れるしらゆき
題しらす 読人しらす

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見ゆ
梅のはなそれとも見えす久方のあまぎる雪のなべてふれれば

此歌は或人のいはく柿本人麿が歌なり

梅の花に雪のふれるをよめる 小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えすとも香をだに匂へ人の知るべく

雪のうちの梅の花をよめる 紀貫之

梅の香の降りおける雪に紛ひせば誰かことごと分きて折らまし

ゆきのふりけるを見てよめる 紀友則

雪ふれば木毎に花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし

物へまかりける人を待ちてしはすのつごもりに

よめる

躬恒

我がまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

年のはてによめる 在原元方

あらたまの年の終になるごとに雪もわが身もふりまさりつつ

寛平の御時后の宮の歌合の歌 読人しらす

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

年のはてによめる 春道列樹

昨日といひ今日と暮してあすか川ながれて早き月日なりけり

歌奉れと仰せられし時によみて奉れる 紀貫之

行く年の惜くもあるかなます鏡みる影さへにくれぬと思へば

古今和歌集 卷第七

賀歌

題しらす

讀人しらす

我が君は千世に八千世にさされ石の巖となりて苔のむすまで
 わたつ海の濱の眞砂を數へつつ君が千とせのありかずにせむ
 しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞ鳴く
 我が齡君がやちよにとり添へてとどめおきてば思ひでにせよ
 仁和の御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌
 かくしつつともかくにも長らへて君が八千代に逢ふ山もがな
 仁和の帝のみこにおはしましける時に御をばの

八十の賀にしろがねを杖につくれりけるを見て

かの御をばにかはりてよめる

僧正遍昭

千早ぶる神やきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

堀河のおほいまうちぎみの四十の賀九條の家に

てしける時によめる

在原業平朝臣

櫻花ちりかひ曇れおいらくの來むといふなるみちまがふがに

さだときの皇子のをばの四十の賀を大井にてし

ける日よめる

紀これをか

龜のをのやまのいはねをとめておつる瀧の白玉千世の數かも

さだやすのみこの後の宮の五十の賀奉りける御

屏風に櫻の花のちる下に人の花見たるかた書け

るをよめる

藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえて花見て暮す春ぞすくなき
もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によ
みて書きける

紀貫之

春くれば宿にまづ咲く梅のはな君がちとせのかざしとぞ見る

素性法師

古へにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ
ふして思ひおきてかぞふる萬世は神ぞしるらむわが君のため

藤原三善が六十の賀によみける

在原滋春

鶴かめも千年ののちは知らなくにあかぬ心にまかせ果ててむ

此歌は或人在原のときばるがともいふ

良岑のつねなりが四十の賀にむすめにかはりてよみ侍
りける

素性法師

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸に池上花といへる事
をよませ給ひける

堀河院御製

池水のそこさへにはふ花ざくら見るともあかじ千代の春まで

大嘗會主基方辰日参入音聲に鼓山をよめる 藤原行盛

音たかきつづみの山のうちはへて楽しき御代となるぞ嬉しき

悠紀方の朝日の里をよめる 藤原敦光朝臣

曇なきとよのあかりにあふみなる朝日の里はひかりさしそふ

巳日の樂の破に雄琴の里をよめる

松風のを琴の里にかよふにぞをさまれる世にこゑはきこゆる

後冷泉院の御時の大嘗會の主基方備中國二萬郷

をよめる 藤原家經朝臣

みつぎもの運ぶよほろを數ふれば二萬の里人かずそひにけり

同國いな井のさとを人にかはりてよめる 高階明頼

苗代のみづはいな井にまかせたり民やすけなる君が御代かな

祝の心をよめる 皇后宮肥後

いつとなく風ふく空にたつちりの數もしられぬ君が御代かな

花契還年といへる事をよめる 太宰大貳長實

花もみな君がちとせをまつなればいづれの春か色もかはらむ

攝政左大臣中將にて侍りける頃春日祭の使にく

だりけるに周防内侍女使にてくだりけるに爲隆 周防内侍

卿行事辨にて侍りけるがもとにつかはしける 藤原道經

いかばかり神あはれもうれしとみかさ山二葉の松の千代のけしきを

題しらす 藤原道經

きみが代はいく萬代かかさぬべきいつぬきがはのつるの毛衣

宇治前太政大臣家の歌合に祝の心をよめる 中納言通俊

君が代は天つ兒屋根こやねの命みことよりいはひぞ初めしひさしかれとは

大藏卿匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむかぎりは

大夫典侍

藤なみは君が千年をまつにこそかけて久しく見るべかりけれ

源忠季

君が代はとみの小川の水すみて千年を經かともたえじとぞ思ふ

藤原爲忠

みづがきのひさしかるべき君が代を天照神やそらにしるらむ

前中宮初めて内へまるらせ給ひける夜雪のふり 宇治前太政大臣

て侍りければ六條右大臣のもとへつかはしける

雪つもる年のしるしにいとどしくちとせの松の花さくぞみる
かへし 六條右大臣

つもるべし雪つもるべし君が代は松の花さくちたび見るまで

天喜四年皇后宮の歌合に祝の心をよませ給うけ

る 後冷泉院御製

長濱の眞砂のかすもなにならずつきせず見ゆる君が御代かな

松上雪をよめる といへる事をよめるイ 源頼家朝臣

萬代のためしと見ゆる松の上に雪さへつもる年にもあるかな

前齋宮伊勢におはしましける頃石などりの石合 歌イ

といへる事をせさせ給ひけるに祝のこころをよ

める 源俊頼朝臣

くもりなくとよさかのほる朝日には君ぞつかへむ萬代までに

金葉和歌集 卷第六

別離歌

兼房朝臣丹後守にてくだりけるに遣しける 大納言經長

君うしやはなのみやこのはなを見で苗代水にいそぐこころは

かへし 藤原兼房朝臣

よそにきく苗代水にあはれわがおりたつ名をも流しつるかな

重尹帥になりてくだり侍るに人々馬のはなむけ 堀河右大臣

し侍りける時よめる

かへるべきたびの別となくさむる心にたがふなみだなりけり

題しらす 讀人しらす

おくれるて我がこひをれば白雲の棚引く山を今日やこゆらむ

經輔卿つくしへくだり侍りけるに具してくだり

けるに道より上東門院に侍りける人につかはし

ける

前太宰大貳長房朝臣

かたしきのそでに獨はあかせどもおつる涙ぞ夜をかさねぬる

是を御覽じてかたはらに書きつけさせ給ひける 上東門院

別路をけにかばかり歎くらむ聞く人さへぞそで濡れける

源公定が大隅守になりてくだりける時月あかか

りける夜わかれをしみてよめる

源 爲 成

はるかなる旅の空にもおくれねばうらやましきは秋の夜の月

對馬守にて小槻のあきみちが下りける時つかは

しける

共イ 爲政朝臣妻

沖つ島くもるの岸を行き返りふみかよはさんまほろしもがな

としよりが伊勢へまかることありてくだりける

とき人々馬のはなむけし侍りける時よめる 参議師頼

伊勢の海をののふるえに朽ちはてで都の方へかへれと思ふ

源行宗朝臣

待ちつけむ我が身なりせば歸るべき程をいく度君にとはまし

百首歌の中に別の心をよめる 中納言國信

今日はさは立ちわかるとも便あらばありやなしやの情忘るな

藤原基俊

秋ぎりの立ちわかれぬる君によりはれぬ思にまどひぬるかな

橘爲仲朝臣みちのくにくだりけるに人々むま

のはなむけし侍りけるによめる 藤原實綱朝臣

人はいさ我が世は末になりぬれば又あふさかも如何まつべき

藤原有定

こひしさはその人かすにあらすとも都を忍ぶうちにいれなむ

經平卿つくしへまかりけるに具してまかりける

中納言通俊

さしのほる朝日に君を思ひ出でむかたぶく月にわれを忘るな

かへし

春宮大夫公實

あさ日とも月ともわかすつかのまも君を忘るる時しなれば

みちのくにへまかりけるにあふさかの關より都

へつかはしける

橘則光朝臣

我ひとり急ぐと思ひしあづまぢに垣根の梅はさきだちにけり

金葉和歌集 卷第七

戀歌上

五月五日はじめたる女のもとにつかはしける 小一條院御製

知らざりき袖のみぬれて菖蒲草かかろこひぢに生ひむ物とは

女のもとにつかはしける 大江公資朝臣

しの薄上葉にすがくささがにのいかさまにせば人なびきなむ

曉の戀をよめる 神祇伯顯仲

さりともと思ふかぎりは忍ばれて鳥と共にぞねはなかれける

つれなかりける女のもとにつかはしける 春宮大夫公實

これにしくおもひはなきを草枕たびに歸すはいなむしろとや

後朝の心をよめる

としよりの朝臣

わが戀はおほろの清水いはでのみ堰きやる方もなくて暮しつ

顯季卿の家にて人々戀の歌よみけるによめる 藤原顯輔朝臣

あふとみて現うつのかひはなけれどもはかなきゆめぞ命なりける

女のもとにつかはしける 源 雅 光

逢ふ迄は思ひもよらず夏なつ引のいとほしとだにいふと聞かばや

從二位藤原親子家の雙紙合に戀の心をよめる 宣 源 法 師

今はただねられぬいをぞ友にとする戀しき人のゆかりと思へば

太宰大貳長實

思ひやれ須磨のうらみて寐たる夜のかたしく袖にかかる涙を

ものいひける女の髪をかきこして見けるをよめ

津 守 國 基

朝寐がみ誰が手枕にたわつけてけさは形見にふりこしてみる

題しらす

讀人しらす

戀すてふ名をだにながせ涙川つれなきひと聞きやわたると

なにせむにおもひかけけむ唐衣戀しきことはみさをならぬに

中納言 雅 定

あふ事はいつとなぎさの濱千鳥波のたちるに音をのみぞなく

ある宮ばらに侍りける人の忍びて宮をいでてあ

やしの小家にて物申して後日ごろありてつかは

しける

春宮大夫公實

思ひいづやありしそのよの吳竹はあさましかりしふし所かな

顯季卿家にて寄織女戀といふ心をよめる 少將公教母

棚機はまたこむ秋も頼むらむ逢ふ夜もしらぬ身をいかにせむ

寄水鳥戀といへることをよめる

源師俊朝臣

水鳥の羽風にさわぐささなみのあやしきまでもぬるる袖かな

寄夢戀といへる事をよめる

左兵衛督實能

ゆめにだに逢ふとは見えよさもこそは現につらき心なりとも

題しらす

中納言顯隆

白雲のかかるやまぢをふみみてぞいとど心はそらになりける

中納言俊忠卿の家にてたのめてあはぬ戀といへ

る心をよめる

源顯國朝臣

逢ひ見むと頼むればこそ吳服くれはきりあやしやいかたちかへるべき

忍戀の心をよめる

中納言實行

谷川のうへは木の葉にうづもれて下にながると人しるらめや

月前戀といへる事をよめる

藤原基光

ながむれば戀しき人のこひしきにくもらばくもれ秋の夜の月

題しらす

讀人しらす

つらしとも恐なるにぞいはれけるいかに恨むと人にしらせむ

もの申しける人の前中宮にまるりにければなご

りを戀ひて月のあかりける夜いひつかはしけ

る

藤原知房朝臣

而かけはかずならぬ身にこひられて雲井の月を誰とみるらむ

さはる事ありて久しうおとづれざりける女のも

とよりのいひ送り侍りける

讀人しらす

淺ましやなどかきたゆる藻鹽草もしほぐささこそは蟹のすさびなりとも

文ばかりおこせていひたえにはる人の許にいひ

遣しける

内大臣家小大進

ふみそめておもひかへりし紅の筆のすさびをいかで見せけむまし

實行卿家の歌合に戀の歌の心をよめる 長實卿母

知るらめや淀の繼橋よとともにつれなき人を戀ひわたるとは

藤原道經

戀ひわびておさふる袖や流れ出づる涙の川のるぜきなるらむ

少將公教母

ながれての名にぞ立ちぬる涙川人目づつみをせきしあへねば

題しらす 皇后宮右衛門佐

涙川そでのるぜきも朽ちはててよどむかたなき戀もするかな

源顯國朝臣

かくとだにまだいはしろの結び松むすほほれたるわが心かな

女のもとにつかはしける 藤原顯輔朝臣

戀すてふもじの關守いく度かわれかきつらむこころづくしに

左兵衛督實能

命だにはかなからずば年ふともあひ見む事を待たましものを

源行宗朝臣

後朝の心をよめる

つらかりし心ならひにあひみても猶夢かとぞうたがはれける 春宮大夫公實

堀河院御時の艶書合によめる

思ひあまりいかでもらさむ奥山のいはがきこむる谷のした水 藤原顯輔朝臣

戀の心をよめる

年ふれど人もすさめぬ我がこひやくち木の柚の谷のうもれぎ 讀人しらす

あるまじき人をおもひかけてよめる

いかにせむ數ならぬ身にしたがはでつつむ袖より落つる涙を 院の熊野にまるらせおはしましける時御迎にま

るりて旅の床の露けかりければよめる
夜もすがら草の枕におく露はふるさと戀ふるなみだなりけり
太宰大貳長實

忍戀の心をよめる
神祇伯顯仲

知らせばやほのみしま江に袖ひぢて七瀬のよどにおもふ心を

野分のわかしたりけるにいかがなどおとづれたりける

人の其後又音もせざりければ遣しける
相模

荒かりし風の後より絶えぬるは蜘蛛くも手にすがく糸にやあるらむ

國信卿の家の歌合に夜戀の心をよめる
源俊頼朝臣

よとともに玉ちるとこのすが枕見せばや人に夜半のけしきを

五月五日わりなくもていでたる所にこもといふ

ものをひきたりけるを忘れがたさにいひ遣しけ

る
相模

すなりにければともに侍りてよめる
紀有常

ひととせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞおもふ

朱雀院の奈良におはしましける時に手向山たむけにて

よめる
菅原朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢの錦神のまにまに

素性法師

手向にはつづりの袖も著るべきに紅葉にあける神やかへさむ

古今和歌集 卷第十

物名

うぐひす

藤原敏行朝臣

心から花のしづくにそほちつうくひすとのみ鳥の鳴くらむ

ほととぎす

くべきほどときすぎぬれや待ちわびて鳴くなる聲の人をとよむる

うつせみ

在原しげはる

波のうつせみれば玉ぞみだれける拾はば袖にはかなからむや

かへし

壬生忠岑

袂より離れて玉をつつまめやこれなむそれとうつせみむかし

うめ

讀人しらす

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香は匂ひつつ

かにはざくら

貫之

かづけども波のなかにはさぐられで風吹くごとに浮き沈む玉

すももの花

今幾日春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり

からももの花

深養父

あふからもものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

たちばな

小野しげかけ

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

をかたまの木

友則

み吉野の吉野の瀧に浮びいづる泡をかたまのきゆと見ゆらむ

山がきの木

讀人しらす

秋はきぬ今やまがきのきりぎりす夜な夜ななかむ風の寒さに

あふひかつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかがつらしと思はざるべき
人めゆゑ後にあふひの遙けくばわがづらきにや思ひなされむ

くたに

僧正遍昭

散りぬれば後はあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな

さうび

貫之

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり
をみなへし

友則

しら露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへし
朝露をわけそほちつつ花見むといまぞ野山をみなへしりぬる

朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしといふ

五文字を句のかしらに置きてよめる

貫之

をぐら山みねたちならしく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

きちかうの花

友則

あきちかうのはなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく
しをに

讀人しらす

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞ移ろひにける

友則

りうたんの花

我が宿の花ふみしだくとりうたんのはななければやここにしもくる

讀人しらす

をばな

ありと見てたのむぞ難き空蟬の世をばなしとや思ひなしてむ
けにごし

矢田部名實

うちつけにこしとや花の色をみむおく白露のそむるばかりを

二條の後春宮の御息所と申しける時にめどにけ

づり花させりけるをよませ給ひける

文屋康秀

花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし果なる時もがな

しのぶぐさ

紀としさだ

山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞ散りける

やまし

平あつゆき

郭公みねの雲にやまじりにし有りとは聞けど見るよしもなき

からはぎ

讀人しらす

空蟬のからはきごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき

かはなぐさ

深養父

うば玉の夢になにかはなぐさまむうつつにだにもあかぬ心を

さがりごけ

たかむこのとしはる

花の色は唯ひとさかりこけれどもかへすがへすぞ露はそめける

にがたけ

滋春

命とて露をたのむにかたければものわびしらになく野邊の蟲

かはたけ

景式王

さよふけてなかばたけゆくひさかたの月吹きかへせ秋の山風

わらび

素性法師

煙たち燃ゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびと名づけそめけむ

ささまつびはばせをば

紀のめのと

いささめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつつ

なしなつめくるみ

兵衛

あぢきなし歎きなつめそ憂き事にあひくるみをば捨てぬ物から

からことといふ所にて春の立ちける日よめる 安倍清行朝臣
波のおとのけさからことなきこゆるは春のしらべや改るらむ

いかが崎

兼 覽 王

かぢにあたる棹の雫を春なればいかがさき散る花と見ざらむ
からさき

阿保のつねみ

かの方にいつからさきに渡りけむ波路はあとも残らざりけり

伊 勢

波の花おきからさきて散りくめり水の春とはかぜやなるらむ

紙屋川

貫 之

うばたまの我がくろかみやかはるらむ鏡のかけにふれる白雪

よど川

あしがきの山邊にをれば白雲のいかにせよとかはるる時なき

かた野

忠 岑

なつぐさのうへはしけれる沼水のゆくかたのなきわが心かな

桂の宮

源 ほどこす

秋くれど月のかつらのみやはなる光をはなとちらすばかりを

百和香

讀人しらす

花毎にあかず散らしし風なれば幾そばくわがうしとかは思ふ

すみながし

滋 春

春がすみなかし通ひ路なかりせば秋くる雁はかへらざらまし

おき火

都 良 香

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむ時やそこは知られむ

ちまき

大 江 千 里

のちまきの後れて生ふる苗なれぎあだにはならぬ頼とぞ聞く

はをばじめるをはてにてながめをかけて時の歌
 よめと人のいひければよめる 僧正聖寶
 はなのなかめにあくやとて分けゆけば心ぞ共にちりぬべらなる

古今和歌集 卷第十一

戀歌一

題しらす

讀人しらす

郭公鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬこひもするかな

素性法師

音にのみきくの白露夜はおきて晝はおもひにあへすけぬべし

紀貫之

吉野川いはなみたかくゆく水のはやくぞ人をおもひそめてし

藤原勝臣

白波のあとなきかたに行く船も風ぞたよりのしるべなりける

音羽山おとに聞きつつあふさかの關のこなたに年をふるかな
立ちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら波

在原元方
貫之

世の中はかくこそありけれ吹く風のめに見ぬ人も戀しかりけり

右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける

車の下簾より女の顔のほのかに見えければよみ

て遣しける

在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や眺め暮さむ

かへし

讀人しらす

知る知らぬ何かあやなく分きていはむ思のみこそしるべなりけれ

春日の祭にまかれりける時に物見に出でたりけ

る女のもとに家を尋ねて遣しける

壬生忠岑

春日野の雪まを分けておひ出くる草のはつかに見えし君かも

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人

のもとに後によみてつかはしける

貫之

山櫻かすみのまよりほのかにも見てしひとこそ戀しかりけれ

題しらす

元方

たよりもあらぬおもひの怪しきは心を人につくるなりけり

凡河内躬恒

初雁のはつかに聲をききしよりなかぞらにのみ物を思ふかな

貫之

逢ふ事は雲井はるかになる神の音にききつつ戀ひわたるかな

讀人しらす

片糸をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせん
ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を戀ふとて
かりごもの思ひ亂れてわが戀ふと妹しるらめや人しつけずば
つれもなき人をやねたく白露のおくとはなけきぬとは忍ばむ
千早ぶる賀茂の社のゆふだすきひとひも君をかけぬ日はなし
わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし
駿河なるたごの浦波たたぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし
夕づく夜さすや岡邊の松の葉のいつともわかぬ戀もするかな
あしびきの山下みづのこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる
吉野川いはきりとほしゆく水の音にはたてじ戀ひはしぬとも
瀧つ瀬の中にもよぎはありてふをなざわが戀の淵瀬ともなき
山高みしたゆく水の下したにのみながれてこひむ戀ひはしぬとも

思ひ出づるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しき物を
人しれず思へばくるしくれなるのすゑつむ花の色にいでなむ
秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや戀ひむあふよしをなみ
わがそのの梅のほづえほづえに鶯のねに鳴きぬべきこひもするかな
あしびきのやま郭公わがごとや君にこひつついねがてにする
夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下みもえにせむ
戀せじと御手洗川みたらしがはにせしみそぎ神はうけずもなりにけらしも
哀てふ事だになくばなにをかは戀のみだれのつかねをにせむ
思ふには忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを
我が戀は人をしるらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ
あさぢふのをのの篠原忍ぶともひと知るらめやいふ人なしに
ひと知れぬ思やなぞと蘆垣あしがきのまぢかけれどもあふよしのなき

思ふとも戀ふとも逢はむ物なれやゆふ手もたゆくとくる下紐
いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ
伊勢の海につりする蟹たぐいのうけなれや心ひとつを定めかねつる
いせの海の蟹たぐいのつりなは打ちはへて苦しとのみや思ひ渡らむ
涙川なになかみをたづねけむ物思ふときのわが身なりけり
種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひばあはざらめやも
朝な朝なたつ川霧の空にのみうきておもひのある世なりけり
忘らるる時しなればあしたづの思ひ亂れてねをのみぞなく
から衣ひもゆふぐれになるときはかへすがへすぞ人は戀しき
よひよひに枕さだめむ方もなしいかになし夜か夢に見えけむ
戀しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞ有るべかりける
人の身もならはし物をあはずしていざ心みむ戀ひや死ぬると

忍ぶれば苦しきものを人しれすおもふこと誰にかたらむ
來む世にもはやなりななむ目の前につれなき人を昔と思はむ
つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな
ゆく水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり
人を思ふ心はわれにあらねばや身の惑ふだに知られざるらむ
おもひやるさかひ遙になりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき
夢のうちにあひみむ事を頼みつつ暮らせる背はねむ方もなし
戀ひ死ねとする業ならしむば玉の夜はすがらに夢に見えつつ
涙川まくら流るるうきねには夢もさだかに見えすぞありける
戀すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬ物ゆる
篝火にあらぬわが身のなぞもかく泪のかはにうきて燃ゆらむ
篝火のかけとなる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけり

早き瀬にみるめおひせばわが袖の涙のかはに植ゑましものを
おきべにもよらぬ玉藻の波の上に亂れてのみや戀ひ渡りなむ
蘆鴨のさわぐ入江のしらなみの知らずや人をかくこひむとは
人しれぬ思をつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ
とぶ鳥のこゑもきこえぬ奥山のふかきところを人は知らなむ
逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人やこひしき音のみなくらむ
あふさかの關に流るるいはしみづいはで心におもひこそすれ
浮草のうへはしけれる淵なれやふかきところを知る人のなき
うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ
心がへするものにもが片戀はくるしきものとひとに知らせむ
よそにして戀ふれば苦しいれひものおなじ心にいざ結びてむ
はるたてば消ゆる氷ののこりなくきみが心はわれにとけなむ

明けたてば蟬のをりはへなきくらしよるは螢のもえこそ渡れ
夏蟲の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなりけり
夕ぐれはいとどひがたき我が袖に秋の露さへおきそはりつつ
いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり
秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心にわすれしもせむ
秋の田のほの上をてらす稻妻のひかりのまにもわれや忘るる
人めもる我かはあやな花薄などかほにいでて戀ひすしもあらむ
あわ雪のたまればがてにくだけつつ我が物思のしけき頃かな
奥山のすがのねしのぎ降る雪のけぬとかいはむ戀のしけきに

古今和歌集 卷第十二

戀歌二

題しらす

小野小町

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを
うたたねに戀しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき
いとせめて戀しきときはむば玉のよるの衣をかへしてぞきる

素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をぞ頼むくるる夜ごとに

しもつ出雲寺に人のわざしける日眞せい法師の
導師にていへりけることばを歌によみて小野小

町がもとに遣しける

安倍清行朝臣

つつめども袖にたまらぬしらたまは人をみぬめの涙なりけり

かへし

小町

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつ瀬なれば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

藤原敏行朝臣

戀ひわびてうちぬる中なかに行き通ふ夢のただちはうつつならなむ
住の江のきしによる波よるさへや夢のかよひ路人目よくらむ

小野のよしき

我が戀はみ山がくれの草なれやしけさまされどしる人のなき

紀友則

宵のまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされる戀もするかな
夕されば螢よりけに燃ゆれどもひかりみねばや人のつれなき

笹の葉におく霜よりもひとりぬる我が衣手ぞさえまさりける
我が宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける
川の瀬になびく玉藻のみがくれて人にしられぬ戀もするかな

壬生忠岑

かきくらし降る白雪の下ぎえにきえて物思ふ頃にもあるかな

藤原興風

君こふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞわれはなりける
死ぬる命いきもやすると試に玉の緒ばかりあはむといはなむ
佗びぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

讀人しらす

わりなくも寐ても覺めても戀しきか心をいづちやらば忘れむ
戀しきにわびて魂まどひなばむなしきからの名にやのこらむ

紀貫之

君こふる涙しなくばからころもむねのあたりは色もえなまし

題しらす

よとともにながれてぞゆく涙川ふゆも氷らぬみなわなりけり
夢路にもつゆはや置くらむよもすがら通へる袖のひぢて乾かぬ

素性法師

はかなくて夢にもひとを見つる夜は朝あしたの床ぞおきうかりける

藤原忠房

いつはりの涙なりせばから衣しのびにそではしほらざらまし

大江千里

音になきてひぢにしかども春雨に濡れにし袖と問はば答へむ

敏行朝臣

我がごとく物やかなしき郭公ときぞともなく夜ただ鳴くらむ

貫之

さつきやま梢を高めほととぎす鳴く音そらなる戀もするかな

凡河内躬恒

秋霧のはるる時なきころにはたちるの空もおもほえなくに

清原深養父

蟲のごと聲にたてては鳴かねども涙のみこそしたにながるれ

讀人しらす

秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我おとらめやひとりぬる夜は

貫之

秋の野にみだれて咲ける花の色のちぐさに物を思ふころかな

躬恒

ひとりしてものを思へば秋の田の稻葉のそよといふ人のなき

深養父

人をおもふ心は雁にあらねども雲井にのみも鳴きわたるかな

忠岑

秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ

貫之

まこもかる淀の澤水雨ふればつねよりことにまさる我がこひ

大和に侍りける人に遣しける

越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたるかな

やよひばかりに物のたうびける人のもとにまた

人まかりてせうそこすと聞きてよみてつかはし

ける

露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとにものおもひぞつく

題しらす

坂上是則

わが戀にくらぶのやまの櫻花まなく散るともかすはまさらじ

むねをかの大頼

冬川のうへはこほれるわれなれや下に流れてこひわたるらむ

忠岑

たきつ瀬にねざしとどめぬ浮草のうきたる戀も我はするかな

友則

よひよひにぬぎて我がぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ

敷妙の枕のしたに海はあれど人を見るめは生ひすぞありける

年をへて消えぬおもひはありながらよるの袂はなほ氷りけり

我が戀はしらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける 貫之

くれなるのふりいでてなく涙には袂のみこそいろまさりけれ

白玉とみえし涙もとしふればからくれなるにうつろひにけり

躬恒

夏蟲をなにかいひけむ心からわれもおもひに燃えぬべらなり

忠岑

風ふけばみねにわかるる白雲のたえてつれなき君がこころか

月影にわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む

深養父

戀ひ死なばたが名はたたじ世の中の常なき物といひはなすとも

貫之

津の國の難波の蘆のめもはるにしけきわがこひ人しるらめや
手もふれで月日へにける白眞弓おきふし夜はいこそねられね
人しれぬ思のみこそわびしけれわがなけきをば我のみぞ知る

友

言にいでていはぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて戀しきものを

躬

君をのみおもひねにせねし夢なればわが心から見ゆつるなりけり

忠

命にもまさりて惜しくある物はみはてぬ夢の覺むるなりけり

春道列

梓弓ひけばどひかれどいとすゑ我がかたによるこそまされ戀のこころは

躬

恒

岑

恒

則

我が戀は行方も知らず果はもなし逢ふをかぎりと思ふばかりぞ
われのみぞ悲しかりける彦星も逢はですぐせる年しなれば
今ははや戀ひしなましをあひみむと頼めしことぞ命なりける

深養父

躬

恒

たのめつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ

友

則

命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに

古今和歌集 卷第十三

戀歌三

やよひのついたりちよりしのびに人に物をいひて

後に雨のそほ降りけるに詠みて遣しける

業平朝臣

起きもせず寐もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮しつ

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみて遣し

ける

敏行朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬひぢいれて逢ふよしもなし

彼の女に代りてかへしによめる

業平朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながるときかばたのまむ

古今和歌集 卷第十三

戀歌三

やよひのついたりちよりしのびに人に物をいひて

後に雨のそほ降りけるに詠みて遣しける

業平朝臣

起きもせず寐もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮しつ

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみて遣し

ける

敏行朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬひぢいれて逢ふよしもなし

彼の女に代りてかへしによめる

業平朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながるときかばたのまむ

題しらす

讀人しらす

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかけとなりనికి
徒いたづらに行きてはきぬる物ゆるゑに見まくほしさにいざなはれつつ
逢はぬ夜のふる白雪とつもりなばわれさへ共にけぬべき物を

此歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり

業平朝臣

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひぢ増りける

小野小町

みるめなきが我身をうらと知らねばやかれなで蟹の足たゆくくる

源宗于朝臣

逢はずして今宵あけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別よりあかつきばかり憂きものはなし

在原元方

逢ふ事のなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立ち歸りける

讀人しらす

かねてより風に先だつ波なれや逢ふ事なきにまだき立つらむ

忠岑

みちのくにありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまだき無き名の立田川渡らでやまむ物ならなくに

元方

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ

讀人しらす

こりすまに又も無き名はたちぬべし人にくからぬ世にし住へば

東ひんがしの五條わたりに人を知りおきて罷り通ひけり

忍びなる所なりければ門よりしもえいらで垣の

くづれより通ひけるをたび重りければ主人かみじ聞き

つけてかの道に夜毎に人をふせて守らすればい

きけれどえあはでのみ歸りてよみてやりける

人しれぬ我が通ひ路の關守はよひよひごとのうちもねななむ

題しらす

忍ぶれどこひしき時はあしびきの山より月のいでてこそくれ

讀人しらす

戀ひこひて稀に今宵ぞ逢坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ

小野小町

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ごとく明けぬる物を

凡河内躬恒

長しともおもひぞはてぬ昔よりあふ人からのあきの夜なれば

讀人しらす

しのめのほがらほがらと明けゆけば己がきぬぎぬなるぞ悲しき

藤原國經朝臣

明けぬとていまはの心つくからになどいひ知らぬ思そふらむ

敏行朝臣

あけぬとて歸る道にはこきたれてあめも涙も降りそほちつつ

寵

しのめの別を惜みわれぞまづ鳥よりさきになきはじめつる

讀人しらす

ほととぎす夢かうつつか朝露のおきて別れしあかつきのこゑ

玉くしけあけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人みけむかも

大江千里

今朝はしもおきけむ方もしらざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき

業平朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり増る哉

業平朝臣の伊勢の國にまかりける時齋宮なりけ

る人にいとみそかに逢ひて又のあしたに人やる

すべなくて思ひをりける間に女のもとよりおこ

せたりける

讀人しらす

君やこしわれやゆきけむおもほえず夢か現かねてか覺めてか

業平朝臣

かへし

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは世人さだめよ
題しらす 讀人しらす

むば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらも優らざりけり
さ夜更けて天のと渡る月かけにあかすも君をあひ見つるかな
君が名も我が名もたてじ難波なるみつともいふな逢ひきともいはじ
名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひみそめけむ
吉野川みづの心ははやくともたきの音にはたてじとぞおもふ
戀しくばしたにを思へむらさきの根すりの衣色にいづなゆめ
小野 春風
花薄ほに出てこひば名ををしみ下ゆふひものむすほほれつつ
橘のきよきが忍びにあひしれりける女のもとよ
讀人しらす
りおこせたりける

思ふどちひとりひとりが戀ひ死なばたれによそへて藤衣きむ

かへし

橘 清 樹

泣きこふる涙に袖のそほちなばぬぎかへがてら夜こそは著め

題しらす

小 町

現にはさもこそあらめ夢にさへひとめをもると見るが佗しさ
限なきおもひのままによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ
夢路には足もやすめす通へども現にひとめ見しことはあらず

讀人しらす

思へども人めつつみの高ければかとは見ながらえこそ渡らね
たきつせの早き心をなにかも人めつつみのせきとどむらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌 紀 友 則

くれなるの色には出でじかくれぬの下に通ひて戀は死ぬとも

題しらす

躬

恒

冬の池にすむには鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな
笹の葉におく初霜の夜をさむみしみはつくとも色に出でめや

読人しらす

山しなの音羽の山のおとにだに人のしるべくわが戀ひめかも

此歌ある人近江のうれめのとなむ申す

清原深養父

滿つ汐の流れひるまを逢ひ難みみるめの浦によるをこそまで

平貞文

白川波のしらすともいはじ底清み流れてよよにすまむと思へば

友則

したにのみ戀ふれば苦し玉の緒の絶えて亂れむ人などがめそ

我が戀を忍びかねてはあしびきの山たちばなの色に出ぬべし

讀人しらす

大方は我が名もみなと漕ぎ出なむよをうみべだにみるめ少なし

平貞文

枕よりまた知るひともなき戀を涙せきあへずもらしつるかな

讀人しらす

風ふけば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

此歌は或人のいはく柿本人麿がなり

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれど顯れにけり
あふことは玉の緒ばかり名のたつは吉野の川の瀧つ瀬のごと
村鳥の立ちにし我が名今更にことなしぶともしるしあらめや
君により我が名は花に春がすみ野にも山にも立ちみちにけり

知るといへば枕だにせでねし物を塵ならぬ名の空に立つらむ

伊

勢

古今和歌集 卷第十四

戀歌四

題しらす

讀人しらす

みちのくの淺香の沼の花がつみかつ見る人に戀ひやわたらむ
あひみずば戀しき事もなからまし音にぞ人を聞くべかりける

貫之

いそのかみふるの中道なかなかに見ずば戀しと思はましやは

藤原ただゆき

君といへば見まれみずまれ富士の嶺の珍らしけなく燃ゆるわが戀

伊勢

夢にだに見ゆとはみえじ朝な朝な我が面影にはづる身なれば

讀人しらす

石間ゆく水の白波立ち返りかくこそは見めあかずもあるかな

伊勢の蟹の朝な夕なに潜かくてふみるめに人を飽くよしもがな

友則

春霞たなびく山のさくらばな見れどもあかぬ君にもあるかな

深養父

心をぞわりなきものと思ひぬる見るものからや戀しかるべき

凡河内躬恒

かれはてむ後をば知らで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

讀人しらす

あすか川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ

寛平の御時后の宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物には有るらむ

題しらす

さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治の橋姫

又は宇治のたまひめ

君やこむわれや行かむのいさよひに横の板戸もささずねにけり

素性法師

今こむといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな

讀人しらす

月夜よし夜よしと人につけやらばこてふに似たり待たずしもあらず

君こそすばねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもおくとも

宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそまで

あな戀しいまも見てしが山賤の垣ほに咲けるやまとなでしこ
津の國のなには思はず山城のとはにあひみむことをのみこそ

貫之

敷嶋のやまとはあらぬ唐衣ころもへずして逢ふよしもがな

深養父

戀しとはたが名づけけむことならむ死ぬとぞ唯にいふべかりける

讀人しらす

みよしのの大川のべの藤波のなみにおもはばわがこひめやは
かく戀ひむ物とはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける
天の原ふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは
梓弓ひき野のつづらすゑつひに我が思ふ人にことのしけけむ

此歌は或人あめのみかどあふみのうれめにたまひけるとな

む申す

夏引の手びきの糸をくり返しことしけくとも絶えむと思ふな

此歌はかへしによみて奉りけるとなむ

里人のことは夏野のしけくともかれゆく君にあはざらめやは

藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女を

あひ知りて文遣せりける言葉に今まうでく雨の

降りけるをなむみわづらひ侍るといへりけるを

聞きてかの女にかはりてよめりける 在原業平朝臣

數々に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

ある女の業平の朝臣をところ定めずありきすと

思ひてよみてつかはしける 讀人しらす

大幣の引く手あまたに成りぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

かへし

業平朝臣

大幣オホヒと名にこそたてれ流れても終によるせはありてふものを

題しらす

讀人しらす

須磨のあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり
玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心の嬉しけもなし
誰が里によがれをしてか時鳥ただここにしもねたるこゑする
いで人はことのみぞよき月草のうつしごころは色ことにして
偽のなき世なりせばいかばかり人のことの葉うれしからまし
いつはりと思ふ物からいまさらにはたが誠をかわれはたのまむ

素性法師

あき風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかがとぞおもふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌

友則

蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむとおもへば

題しらす

讀人しらす

空蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬもののかれぬべらなり
あかでこそ思はむなかは離れなめそをだに後の忘れがたみに
忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ戀悲しき
わすれなむわれをうらむな時鳥人のあきにはあはむともせず
絶えずゆくあすかの川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

此歌ある人のいはくなかとみのあづま人が歌なり

淀川よどむと人は見るらめどながれてふかき心あるものを

素性法師

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたて

讀人しらす

くれなるの初花ぞめのいろふかくおもひし心われわすれめや

河原左大臣

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆるゑに亂れむと思ふわれならなくに

讀人しらす

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

ちぢの色にうつろふらめど知らなくに心し秋の紅葉ならねば

小野小町

蟹の住む里のしるべにあらなくに恨みむとのみ人のいふらむ

しもつけのをむね

曇日くもりひの影としなれるわれなれば目やにこそ見えね身をば離れず

貫之

色もなき心を人に染めしよりうつろはむとはおもほえなくに

讀人しらす

珍らしき人を見むとやさかもせぬわが下紐のとけわたるらむ

陽炎ひょうえんのそれかあらねか春雨のふるひとなればそでぞぬれぬる

堀江こぐたななし小船こぎ歸りおなじ人にやこひわたりなむ

伊勢

わたつ海とあれにし床を今更にはらはば袖やあわとうきなむ

貫之

いにしへに猶たちかへる心かな戀しきことにものわすれせで

人をしのびにあひしりて逢ひがたくありければ

其家のあたりをまかりありきけるをりに雁のな

くを聞きてよみてつかはしける

思ひ出でて戀しきときは初雁のなきてわたると人しるらめや

大伴黒主

右のおほいまうち君すますなりにければかの昔
おこせたりける文どもを取りあつめて返すとて

よみて送りける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉今はかへしてむ我が身ふるればおき所なし

かへし

近院右大臣

今はとて返す言の葉ひろひ置きておのが物から形見とやみむ

題しらす

よるかの朝臣

玉ほこの道は常にもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ

讀人しらす

待てといはばねてもゆかなむしひて行く駒の足をれ前の柵橋

中納言源の昇の朝臣の近江の介に侍りける時に

よみてやれりける

閑

院

逢坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め

題しらす

伊

勢

故郷にあらぬものからわがためにひとの心のあれてみゆらむ

寵

山がつの垣ほにはへる青つづら人はくれどもことつてもなし

さかるのひとさね

大空はこひしき人の形見かはもの思ふごとにながめらるらむ

讀人しらす

逢ふまでの形見も我はなにせむに見ても心のなぐさまなくに

親の守りける人のむすめにいと忍びにあひて物

らいひけるあひだにおやのよぶといひければ急

ぎかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りにけるそ

ののち裳を返すとてよめる

興

風

逢ふまでの形見とてこそとどめけめ涙に浮ぶもくづなりけり

題しらす

讀人しらす

形見こそ今はあたなれこれなくば忘るる時もあらましものを

古今和歌集 卷十五

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對たに住みける人にほい
 にはあらでものいひ渡りけるを陸月の十日あま
 りになむ外へ隠れにけるあり所は聞きけれどえ
 物もいはで又の年の春梅の花ざかりに月の面白
 かりける夜こ去こ年ををこひてかの西の對たにいきて月
 の傾くまであばらなる板敷にふせりてよめる
 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

在原業平朝臣

藤原仲平朝臣

花薄われこそしたに思ひしかほに出てひとにむすばれにけり

藤原兼輔朝臣

よそにのみ聞かまし物を音羽川渡るとなしにみなれそめけむ

凡河内躬恒

わがごとくわれを思はむ人もがなさてもやうきと世を試みむ

元方

久方のあまつ空にもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる

讀人しらす

見てもまた又も見まくのほしければなるを人は厭ふべらなり

紀友則

雲もなくなぎたる朝の我なれやいとほれてのみ世をばへぬらむ

讀人しらす

花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらむ數ならぬ身は
うきめのみ生ひて流るる浦なればかりにのみこそ蟹はよるらめ

伊勢

逢ひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるるがほなる

讀人しらす

秋ならでおく白つゆはねざめする我がたまぐらの雫なりけり
須磨の蟹の鹽燒衣しほやきころもをさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ
山城の淀のわかごもかりにだにこぬ人たのむわれぞはかなき
逢ひみねば戀こそまされ水無瀬川なにに深めて思ひそめけむ
曉のしぎのはねがきもも羽がき君がこぬ夜はわれぞかすかく
たまかづら今はたゆとや吹く風のおとにも人の聞えざるらむ
わが袖にまだきしぐれのふりぬるは君が心にあきやきぬらむ

山の井のあさき心もおもはぬにかけばかりのみ人の見ゆらむ
忘れ草たねとらましを逢ふ事のいとかく難きものとしりせば
こふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへやおひ茂るらむ
夢にだにあふことかたくなり行くは我やいをねぬ人や忘るる

兼 藝 法 師

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞ遙けかりける

貞 登

獨のみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞ生ひける

僧 正 遍 昭

我が宿は道もなき迄あれにけりつれなき人を待つとせしまに
今こむといひて別れし朝よりおもひくらしのねをのみぞなく

讀 人 し ら す

こめやとは思ふ物からひぐらしのなく夕暮はたち待たれつつ
今しはとわびにし物をささがにの衣にかかりわれをたのむる
今はこじと思ふ物から忘れつつ待たる事のまだもやまぬか
月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなむ佗びつつもねむ
植ゑていにし秋田刈る迄見えこねばけさ初雁のねにぞ鳴きぬる
こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ
久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しき物にぞありける

兼 覽 王

住の江のまつ程久に成りぬれば蘆たづのねになかぬ日はなし

仲平の朝臣あひしりて侍りけるをかれがたに成
りにければ父が大和の守に侍りけるもとへまか
るとてよみて遣しける

伊 勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

題しらす

雲林院のみこ

吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこころの

小野小町

今はとて我が身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

小野さだき

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りもみだれめ

業平の朝臣紀の有常がむすめにすみけるを恨む

ることありてしばしのおひだひるはきて夕さり

は歸りのみしければよみて遣しける

天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆる物から

かへし

業平朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることは我がる山の風早みなり

題しらす

かけのりの王

唐衣なれば身にこそ纏まっはれめかけてのみやは戀ひむとおもひし

友則

秋風は身をわけてしも吹かなくにひとの心のそらになるらむ

源宗于朝臣

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

心地そこなへりける頃あひしりて侍りける人の

とはで心地おこたりて後とぶらへりければよみ

て遣しける

兵衛

しでの山麓を見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

あひしれりける人のやうやくかれがたになりけ

るあひだにやけたるちの葉に文をさしてつかは
せりける

小町が姉

時すぎて枯れゆく小野の淺茅には今はおもひぞ絶えずもえける

物思ひける頃物へまかりける道に野火のもえけ

伊勢

るを見てよめる

冬枯の野邊と我が身を思ひせばもえても春をまたましもものを

友則

題しらす

水の沫のきえでうき身といひながら流れて猶も頼まるるかな

讀人しらす

水無瀬川ありて行く水なくばこそ終に我がみをたえぬと思はめ

躬恒

よしの川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

讀人しらす

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすきいろにぞありける

心こそうたてにくけれ染めざらばうつろふ事も惜からましや

小町

色みえでうつろふものは世の中のひとの心の花にぞありける

讀人しらす

われのみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなば

素性法師

思ふともかれなむ人を如何せむあかず散りぬる花とこそ見め

讀人しらす

今はとて君がかれなば我が宿の花をばひとり見てやしのばむ

宗于朝臣

忘れ草かれもやするとつれもなき人のこころに霜は置かなむ

寛平の御時御屏風に歌かかせ給ひける時よみてかきける 素性法師

わすれぐさなにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

題しらす

秋の田のいねてふ事もかけなくに何をうしとか人のかるらむ

紀貫之

初雁の鳴きこそわたれ世の中の人のこころのあきしうければ

讀人しらす

あはれとも愛しともものを思ふ時などか涙のいとなかるらむ

身を愛しと思ふに消えぬ物なればかくても経ぬる世にこそ有りけれ

典侍藤原直子朝臣

蟹のかる藻に住む蟲の我からとねをこそなかも世をば恨みじ

いなば

あひみぬもうきも我が身の唐衣思ひしらすも解くるひもかな

寛平の御時后の宮の歌合の歌 菅野忠臣

つれなきを今は戀ひじと思へどもこころよわくもおつる涙か

題しらす 伊勢

人知れず絶えなましかば佗びつつもなき名ぞとだにいはまし物を

讀人しらす

それをだに思ふ事とて我が宿をみきとないひそ人のきかくに

逢ふ事のもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ

佗びはつるときさへ物の悲しきはいつこをしのぶ涙なるらむ

藤原興風

うらみても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

讀人しらす

夕されば人なき床をうちはらひ歎かむためとなれる我が身か
 わたつみの我が身こそ波立ち返り蟹の住むてふ浦みつるかな
 あら小田をあらすきかへし返しても人の心を見てこそやまめ
 ありそ海の濱の眞砂と頼めしは忘るることの數にぞ有りける
 蘆べより雲井をさしてゆく雁のいやとほざかる我が身悲しも
 しぐれつつもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき
 あき風の吹きとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれ我が身空しくなりぬと思へば

平貞文

秋風の吹きうらがへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかな

讀人しらす

秋といへば外にぞ聞きしあだ人の我を古せる名にこそ有りけれ
 忘らるる身をうぢ橋の中たえて人もかよはぬとしぞへにける
 又はこなたかなたに人も通はず

坂上是則

逢ふ事を長柄の橋のながらへて戀ひわたるまに年ぞへにける

友則

うきながらけぬる沫ともなりななむ流れてとだに頼まれぬ身は

讀人しらす

流れてはいもせの山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

古今和歌集 卷第十六

哀傷歌

妹の身まかりける時よみける

小野篁朝臣

泣くなみだ雨とふらなむ渡り川水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいもうち君を白河のあたりに

おくりける夜よめる

素性法

血の涙落ちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそありけれ

堀河のおほきおほいもうち君身まかりにける時

に深草の山にをさめて後に詠みける

僧都勝延

うつせみはからを見つともなぐさめつ深草のやま煙だにたて

深草の野邊のさくらし心あらばことしばかりは墨ぞめにさけ

かんつけの岑雄

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によりてかの

家に遣しける

紀友則

寝ても見ゆねでも見えけり大方は空蟬の世ぞ夢には有りける

あひ知れりける人の身まかりにければよめる

紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世の中に現あるものと思ひけるかな

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる

玉生忠岑

ぬるが内に見るをのみやは夢と言はむはかなき世をも現とはみず

姉のみまかりにける時によめる

瀬をせけば淵と成りてもよどみけりわかれをとむる柵ぞなき

藤原のただふさが昔あひ知りて侍りける人の身

まかりにける時にとぶらひに遣すとてよめる 閑院
さきだたぬくいの八千度悲しきは流るる水のかへりこぬなり

紀友則が身まかりにける時よめる

貫之

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ

忠岑

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを

母がおもひにてよめる

凡河内躬恒

神無月しぐれにぬるるもみぢ葉はただわびびとの袂なりけり

父がおもひにてよめる

忠岑

ふぢごろもはつる糸はわびびとの涙の玉の緒とぞなりける

おもひに侍りける年の秋山寺へまかりけるみち

貫之

朝露のおくての山田稻葉かりそめにうきよの中をおもひぬるかな

おもひに侍りける人をとぶらひに罷りてよめる 忠岑

すみぞめの君がたもとは雲なれや絶えず涙のあめとのみふる

めの親のおもひにて山寺に侍りけるをある人の

とぶらひ遣せりければ返事によめる 讀人しらす

あしびきの山邊にいまはすみぞめの衣の袖のひるときもなし

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる 笹朝臣

水の面にしづく花の色さやかにも君がみ影のおもほゆるかな

深草の帝の御國忌の日よめる 文屋康秀

草深き霞の谷にかけかくし照る日のくれし今日にやはあらぬ

深草の帝の御時に藏人の頭にてよるひるなれつ

かうまつりけるを諒闇に成りにければ更に世に

もまじらずして比叡の山に登りてかしらおろし
 てけりその又の年みな人御ぶくぬぎてあるはか
 うぶり給はりなどよろこびけるを聞きてよめる 僧 正 遍 昭
 みな人ははなの衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ

河原のおほいまうち君の身まかりての秋かの家
 の邊をまかりけるに紅葉の色まだ深くもならざ
 りけるを見てかの家によみていれたりける 近 院 右 大 臣

うちつけに寂しくも有るかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり
 藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又の年の 貫 之
 夏郭公のなきけるを聞きてよめる

郭公けさなく聲におどろけば君にわかれしときにぞありける
 櫻を植ゑてありけるにやうやく花咲きぬべき時

にかの植ゑける人身まかりにければその花を見
 てよめる 紀のもちゆき

花よりも人こそあだになりにつれを先に戀ひむとか見し
 あるじ身まかりにける人の家の梅の花をみてよ
 める 貫 之

色も香もむかしのこさに匂へどもうゑけむ人の影ぞこひしき
 河原の左のおほいまうちぎみの身まかりて後か
 の家にまかりてありけるに鹽釜といふ所のさま
 をつくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまのうら寂しくも見えわたるかな
 藤原の利基の朝臣の右近中將にてすみ侍りける
 ざうしの身まかりて後人もすまずなりにけるに

秋の夜ふけて物よりまうできけるついでに見い
れければもとありし前まへ裁いと茂く荒れたりける
を見て早くそこに侍りければ昔を思ひやりてよ
みける

みはるのありすけ

君が植ゑし一むら薄蟲の音のしけき野邊ともなりにけるかな

惟喬のみこの父の侍りけむ時によめりけむうた
どもとこひければかきて送りける奥によみて書
けりける

友 則

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙の瀧まさりけり

題しらす 讀人しらす

なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつけなむ
誰みよと花さけるらむ白雲のたつ野とはやくなりにしものを

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりける
をいくばくもあらで女のみこの身まかりにける
時にかのみこの住みける帳のかたびらのひもに
ふみをゆひつけたりけるを取りてみれば昔の手
にてこの歌をなむ書きつけたりける

かすかすにわれを忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ
をとこの人の國にまかりけるまに女にはかに病
をしていとよわくなりける時よみ置きて身まか
りにける

讀人しらす

聲をだに聞かで別るるたまよりもなき床にねむ君ぞかなしき
やまひにわづらひ侍りける秋こちのたのもし
けなくおほえければよみて人のもとにつかはし

ける

大江千里

もみぢ葉を風に任せて見るよりもはかなきものは命なりけり

みまかりなむとてよめる

藤原これもと

露をなどあだなる物と思ひけむ我が身も草におかぬばかりを

やまひして弱くなりける時よめる

業平朝臣

終に行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

甲斐の國にあひ知りて侍りける人とぶらはむと

てまかりける道なかにてにはかに病をしていま

いまとなりにければよみて京にもてまかりて母

に見せよといひて人につけ侍りける歌

在原滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今は限のかどでなりけり

古今和歌集 卷第十七

雑歌上

題しらす

讀人しらす

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのしづくか
思ふどちまとるせる夜は唐錦たたまく惜しき物にぞ有りける
うれしきをなにつつまむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを
かぎりなき君が爲にと折る花は時しもわかぬ物にぞありける

或人のいはく此歌はさきのおほいまうち君のなり

紫のひととゆるに武藏野のくさはみながらあはれとぞ見る
めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬを

おくるとてよみてやりける

業平朝臣

紫のいろこきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

大納言藤原のくにつねの朝臣宰相より中納言に

なりける時にそめぬうへのきぬのあやをおくる

とてよめる

近院右大臣

色なしと人や見るらむむかしよりふかき心にそめてしものを

石の上のなんまつが宮仕もせでいその上といふ

所にこもり侍りけるを俄にかうぶりたまはれり

ければ悦いひつかはすとてよみて遣しける

布留今道

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花も咲きけり

二條の後のまだ東宮の御息所と申しける時に大

原野に詣うで給ひける日よめる

業平朝臣

おほはらや小鹽の山も今日こそは神代のことと思ひ出づらめ

五節の舞姫を見てよめる

良岑宗貞

あまつ風雲のかよひぢ吹きとぢよをとめの姿しぼしとどめむ

五節のあしたにかむざしの玉の落ちたりけるを

見て誰がならむととぶらひて詠める

河原左大臣

ぬしや誰とへどしら玉いはなくにさらばなべてや哀と思はむ

寛平の御時にうへのさぶらひに侍りけるをのこ

ども瓶を持たせて後の宮の御方におほみきのお

ろしときこえに奉りたりけるを藏人ども笑ひて

瓶を御前にもて出でてともかくもいはすなりに

ければ使の歸りきてさなむありつるといひけれ

ば藏人のなかに送りける

敏行朝臣

玉垂のをがめやいづらこよろぎの磯の波わけ沖に出でにけり

女どもの見て笑ひければよめる
けんけい法師

かたちこそみやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

方たがへに人の家にまかれりける時にあるじの

きぬを著せたりけるをあしたにかへすとてよみ

ける
紀友則

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

題しらす
読人しらす

遅く出づる月にもあるかな足引の山のあなたも惜むべらなり

我が心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

業平朝臣

大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

月おもしろしとて凡河内躬恒がまうできたりけ

るによめる
紀貫之

かつ見れど疎くも有るかな月影の到らぬ里もあらじと思へば

池に月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなどこに山の端ならで出づる月影

題しらす
読人しらす

あまのがは雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞながるる

あかずして月の隠るる山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

惟喬のみこの狩しける供にまかりてやどりに歸

りて夜ひとよ酒をのみ物語をしけるに十一日の

月も隠れなむとしける折にみこ酔ひて内へ入り

なむとしければよみ侍りける
業平朝臣

あかなくにまだきも月の隠るるか山の端にけて入れずもあらなむ

田村の帝の御時に齋院に侍りけるあきらけいこ

のみこを母あやまちありといひて齋院をかへら

れむとしけるを其事やみにければよめる
あま敬信

おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせども光けなくに

題しらす
讀人しらす

石の上かまふるから小野のもとがしはもとの心はわすられなくに

いにしへの野中のしみづぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

古のしづのをだまき賤しきもよきもさかりはありしものなり

今こそあれわれもむかしは男山さかゆく時もありこしものを

世の中にふりぬるものは津の國の長柄ながらの橋とわれとなりけり

笹の葉に降りつむ雪のうれを重みもとくだちゆく我が盛はも

おほあらしきの森の下草おいぬれば駒もすさめすかる人もなし

又はさくらあさのをふの下草おいぬれば

數ふればとまらぬ物をとしといひて今年は痛く老いぞしにける

おしてるや難波のみつに焼く鹽のからくも我は老いにけるかな

又はおほとものみつの濱邊に

老いらくのごむと知りせば門さしてなしと答へて逢はざらましを

此三つの歌は昔ありけるみたりの翁のよめるとなむ

さかさまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齡や共に歸ると

とりとむる物にしあらねば年月を哀あなうとすぐしつるかな

留とどめあへず宜よろもとしとは言はれけり然もつれなくすぐる齡か

鏡山いざたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

此歌はある人のいはく大伴黒主がなり

業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りけるときに業平

みやづかへすとて時々もえまかりとぶらはす侍

りければしはすばかりに母のみこのもとよりと

みの事とて文をもてまうできたりあけて見れば

ことばはなくて有りける歌

老いぬればさらぬ別のありといへば彌々見まくほしき君かな

かへし

業平朝臣

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなけく人の子のため

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

在原むねやな

白雪のやへふりしけるかへる山かへるがへるも老いにけるかな

同じ御時うへのさぶらひにてをのこともにおほ

みき給ひておほみあそびありけるついでにつか

うまつれる

敏行朝臣

老いぬとてなどか我が身をせめきけむ老いすは今日にあはまし物か

題しらす

讀人しらす

千早振うぢの橋守なれをしぞあはれとはおもふ年のへぬれば

我が見てもひさしくなりぬ住吉すまのよのきしの姫松いく世經ぬらむ

すみよしの岸の姫松ひとならば幾代か經しと問はましものを

あづさゆみ磯邊の小松たがよにか萬代かけてたねをまきけむ

この歌はある人のいほく柿本人麿がなり

かくしつづ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに

藤原興風

たれをかも知る人にせむたかさごのまつも昔の友ならなくに

讀人しらす

わたつ海の沖つ鹽あひに浮ぶ沫の消えぬ物からよる方もなし
わたつみのかざしにさせる白妙のなみもてゆへるあはぢ島山
わたの原よせくる波のしばしばも見まくのほしき玉津島かも
なにはがた汐みちくらしあま衣たみの島にたづなきわたる

貫之が和泉の國に侍りける時にやまとよりこえ
まうできてよみて遣しける

藤原忠房

君を思ひ沖つの濱に鳴くたづの尋ねくればぞありとだに聞く

かへし

貫之

沖つ波たかしの濱のはままつの名にこそ君をまちわたりつれ

なにはにまかれりける時によめる

難波潟おふる玉藻をかりそめの蟹とぞわれはなりぬべらなる

あひ知れりける人の住吉にまうでけるによみて

つかはしける

壬生忠岑

すみよしと蟹はつぐともながるすな人忘れ草おふといふなり

難波へまかりけるとき田養の島にて雨にあひて

よめる

貫之

雨により田養の島を今日ゆけばなには隠れぬ物にぞ有りける

法皇西川におはしましたりける日鶴洲にたてり

といふことを題にてよませ給ひける

あしたづのたてる川邊を吹く風によせて歸らぬ波かとぞ見る

中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじ

めてあそびける日法皇御覽じにおはしましたり

けり夕さりつかた歸りおはしまさむとしける折

によみて奉りける

伊勢

水の上に浮べる船の君ならばここぞとまりといはましものを
からことといふ所にてよめる 眞せい法師

都までひびきかよへるからことは波の緒すけて風ぞひきける

布引の瀧にてよめる 在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうきときの涙にぞかる

布引の瀧のもとにて人々あつまりて歌よみける

時によめる 業平朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

吉野の瀧を見てよめる 承均法師

誰が爲にひきて洒せる布なれや世をへて見れどとる人のなき

題しらす 神たい法師

きよたきの瀧々の白糸くりためてやまわけ衣おりてきまましを

龍門にまうでて瀧のもとにてよめる 伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

朱雀院の帝布引の瀧御覽ぜむとてふん月の七日

の日おはしましてありける時にさぶらふ人々に

歌よませ給ひけるによめる 橘長盛

主なくてさらせる布をたなばたにわが心とや今日はかさまし

比叡の山なるおとはの瀧を見てよめる 忠岑

落ちたぎつ瀧のみななみ年積り老いにけらしな黒きすぢなし

おなじ瀧をよめる 躬恒

風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつるみづにぞありける

田村の御時に女房のさぶらひにて御屏風の繪御

覽じけるに瀧落ちたりける所面白し是を題にて

歌よめとさぶらふ人に仰せられければよめる。三條の町
おもひせく心のうちの瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

屏風の繪なる花をよめる 貫之

咲きそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の繪により合せてかきける 坂上是則

刈りてほす山田の稻のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

古今和歌集 卷第十八

雑歌下

題しらす

讀人しらす

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬とイになる
幾世しもあらじ我が身をなぞもかく蟹の刈藻に思ひみだるる
雁のくるみねの朝霧はれずのみおもひつきせぬ世の中のうさ

小野篁朝臣

然りとて背そむかれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中

甲斐の守にて侍りける時京へまかりのほりける

小野貞樹

みやこびといかにと問はば山高みはれぬ雲井にわぶと答へよ

文屋の康秀が三河のぞうに成りてあがた見には

え出でたたじやと云ひやれりける返事によめる 小野 小町

侘びぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

題しらす

あはれてふ事こそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ

讀人しらす

あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

世の中のうきもつらきもつけなくにまづしるものは涙なりけり

世の中は夢か現かうつつともゆめとも知らずありてなければ

世の中にいづら我が身のありてなし哀とやいはむあなうとやいはむ

山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり

惟喬のみこ

白雪の絶えずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ

布留今道

知りにけむ聞きても厭へ世の中は波のさわぎに風ぞしくめる

素性

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

讀人しらす

世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか

世の中をいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出でにけむ

み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

世にふればうさこそまされみ吉野の岩の陰路ふみならしてむ

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ

足引の山のまにまにかくれなむうき世の中はあるかひもなし
世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし

おなじ文字なき歌

もののべのよしな

世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ

山の法師のもとへつかはしける

凡河内躬恒

世をすてて山にいる人やまにても猶うき時はいづち行くらむ

物おもひける時いときなき子を見てよめる

今更になに生ひいづらむ竹の子のうきふし繁きよとはしらすや

題しらす

讀人しらす

よにふればことの葉しけきくれ竹のうきふしごとに繁ぞなく

木にもあらず草にもあらずぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべらなり

ある人のいはくたかつの皇子の歌なり

わが身からうき世の中と歎きつつ人のためさへ悲しかるらむ

隱岐の國に流されて侍りける時によめる 篁 朝 臣

思ひきやひなの別におとろへて蟹のなはたぎいさりせむとは

田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ

所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に

遣しける

在原行平朝臣

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ

左近將監とけて侍りける時に女のとぶらひにお

こせたりける返事によみて遣しける

小 野 春 風

あまびこの訪れじとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に

つかさとけて侍りける時よめる

平 貞 文

憂世には門させりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする

ありはてぬ命待つまの程ばかりうきことしけく思はずもかな歎か

みこの宮の帯刀に侍りけるを宮づかへつかうま

つらずとて解けて侍りける時によめる みやぢのきよき

筑波嶺のこのもと毎に立ちぞよる春のみ山のかけを戀ひつつ

時なりける人の俄に時なくなりて歎くを見てみ

づからのなけきもなくよろこびもなきことを思

ひてよめる

清原深養父

光なき谷には春も外まなれば咲きてとくちるものおもひもなし

桂に侍りける時に七條中宮とはせ給へりける御

かへり事に奉りける

伊勢

ひさかたのなかにおひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる

紀の利貞が阿波の介にまかりける時むまのはな

むけせむとて今日といひおくれりける時にここ

かしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざり

ければ遣しける

業平朝臣

今ぞ知る苦しきものと人またむ里をばかれず問ふべかりけり

惟番のみこの許にまかり通ひけるをかしらおろ

して小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらは

むとてまかりたりけるに比叡の山の麓なりけれ

ば雪いと深かりけりしひて彼のむろにまかりい

たりてをがみけるに徒然とらとしていと物悲しくて

歸りまうできてよみて送りける

忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは

深草の里にすみ侍りて京へまうでくとてそこな

りける人によみておくりける

年をへて住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

かへし

讀人しらす

野とならば鶉と鳴きて年はへむかりにだにやは君はござらむ

題しらす

我を君難波の浦に有りしかば憂きめをみつのあまと成りにき

この歌はある人むかし男ありけるをうなの男とはすなりに

ければ難波のみつの寺にまかりて尼になりてよみて男に遣

せりけるとなむいへる

かへし

難波濁うらむべきまも思ほえず何處をみつのあまとかはなる

今さらにとふべき人もおもほえず八重葎してかどさせりてへ

友だちの久しうまうでござりけるもとによみて

遣しける

躬

恒

水の面におふるさ月の浮草のうきことあれや根を絶えてこぬ

人をとほで久しうありけるをりにあひうらみけ

ればよめる

身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

むねをかのおほよりが越よりまうできたりける

ときに雪の降りけるを見ておのがおもひはこの

雪のごとくなむ積れるといひける折によめる

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

かへし

宗岳大頼

君をのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆるときある

越なりける人に遣しける

紀貫之

思ひやるこしの白山しらねどもひとよも夢にこえぬ夜ぞなき

題しらす

讀人しらす

いざここに我が世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

我が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひきませ杉たてるかど

喜撰法師

我が庵は都のたつみしかぞすむ世をうちやまと人はいふなり

讀人しらす

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

奈良へまかりける時にあれたる家に女の琴ひき

けるをききてよみていれたりける

良岑宗貞

佗人のすむべき宿と見るなべになけきくははる琴の音ぞする

初瀬に詣づる道に奈良の京にやどれりけるとき

よめる

二條

人ふるす里をいとひてこしかどもならの都もうき名なりけり

題しらす

讀人しらす

世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿と定むる

逢坂のあらしの風はさむけれど行方しらねば佗びつつぞぬる

風の上にあるか定めぬ塵の身は行方も知らずなりぬべらなり

家をうりてよめる

伊勢

飛鳥川ふちにもあらぬわが宿もせに變りゆく物にぞありける

つくしに侍りける時にまかり通ひつつ暮うちけ

る人の許に京に歸りまうできてつかはしける

紀友則

故郷は見しごとあらず斧の柄のくちし所ぞこひしかりける